
特殊警吏隊士 海宝紫

甲斐日向

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特殊警吏隊士 海宝紫

【Nコード】

N7084H

【作者名】

甲斐日向

【あらすじ】

警吏隊 町の平和と安全を守り、犯罪の予防・捜査などを主な目的とする組織。警吏隊士である紫が所属しているのは、異能者や人外だらけの特殊課！騒がしい仲間たちといつもながらの朝を過ごしていた紫のもとに、警吏庁総帥直々に捜査の依頼が…！

巻（前書き）

この作品は都合上、機種依存文字を使用することがあるため、PC
閲覧推奨です。携帯閲覧の方は機種によっては文字化けする恐れが
あるため、お手数ですが、作者運営のサイトからご覧下さい。

巻

空は快晴。見事な青空だ。こんな日は外に出て、公園でも野原でも海にでも行きたくなる。

行きたくはなるけど…僕にそんな暇はない。だって、僕はこれから仕事だから。

朝の通勤ラッシュ時、僕は大通りの歩道を走っていた。ラッシュ時と言っても、この通りはさほど混んでない。

僕は海宝かいほうゆかり紫。薄手のパーカーにボーダーのTシャツ。

ヴィンテージのジーンズに、人気ブランドの五年ものスニーカー。

小さなリュックを背負った僕は、どこにでもいるような平凡な男さ。

でも、僕が勤務している職場はちょっと“普通”じゃない。

警吏庁けいりちやう 町の平和と安全と秩序を守り、犯罪の予防や事件の捜査・解決、犯人の逮捕などを職務としている機関で、警吏庁に所属している人たちを警吏隊けいりたいと言う。

僕はその警吏隊士なんだ。職業は何かと訊かれて、警吏隊士だと答えると、誰もが顔を綻ばせる。

けど、部署はどこかと訊かれて答えると、誰もが決まりの悪い顔をする。

別に、その部署がいけないわけじゃない。ただね、そこに所属しているヒトたちが、ちよつと“特殊”なだけで……

僕は前方に見えた黒い建物に入っていく。ここが僕の勤務する警吏庁総本部。

警吏隊の中でも超エリートが集まる、警吏庁の中枢だよ。そう聞くと、結構すごいでしょ

まあ、だからってエリートしか入れないわけじゃなく、ここ、王都・宝生ほうせいの警吏庁はこの総本部しかないから、宝生で警吏庁に入

るとしたら、必然的にここに入るしかないんだけどね。

中に入ると、赤い隊士服を着た人たちがたくさんいる。僕に気づいて挨拶してくれる人に挨拶を返し、左手の通路を通って別棟に行く。

それから中庭を通ってさらに奥。別棟とも切り離された一つの建物。

警吏庁の敷地の中で、孤島のようなこの建物。ここが僕の所属している、警吏庁刑事部特殊課。

その入口に立っている警備員ガードのヒューマノイドに、IDカードを見せる。

「おはようー!」

「おはようございます」

ヒューマノイドは僕の顔とIDカードを一瞥すると、無表情でぺこりと軽く頭を下げる。

ヒューマノイドは人間とほとんど変わらない外見をしているけれど、実は機械でできた人形なんだ。

彼らは大まかに業務用と家庭用に分かれていて、業務用はあらゆるところで警備員ガードや職員として活躍している。

家庭用は、一般家庭に家族の一員として受け入れられているんだ。細かく分類するといろいろ種類があるらしいけど、それはまた別の話で。

僕は階段を上がり、二階の一番端にある、『特殊課第三班』と書かれたプレートが付いている一室へと走る。そこが僕の仕事部屋。一度ドアの前で止まって、呼吸を整えてからボタンを押して自動ドアを開けた。

広々とした部屋。けれど、四つのワークデスクと、その奥向こうにあるガラス製の長テーブル、それを挟んで置かれた、一人寝転がれそうな 実際、男性が一人、寝転がっている チョコレート라운のソファ二つのおかげで、狭く感じられる。

ワークデスクで化粧をしている人、窓辺に寄りかかって外を見て

いる人、イヤホンをつけてソファでゲームをしている人など、各々くつろいでいる人たちに、僕は笑顔で声をかけた。

「おはようございます！」

「ただど返事は誰一人としてなし。こつちを見さえしない。」

「なんたることだ！ 朝の挨拶くらいしろよ〜っ。その時、僕は右袖を軽く引つ張られてそつちを見た。」

「……あ、一人だけいた。声が聞こえなかったから見落としたけど……【おはようございます】と書かれたスケッチブックを持っている女の子。」

「気恥ずかしそうに、スケブの後ろから顔の上半分を覗かせている彼女は、金成屋春希ちゃん。本人いわく口下手で、こうしてスケブに文字を書いて話すんだ。」

「……まあ、彼女の場合はそれだけじゃないんだけど。」

「おはよう、春希ちゃん」

「ニコツと笑うと、春希ちゃんはなぜか顔を赤くしてスケブの裏に顔を隠してしまった。」

「春希ちゃんくらいだよなあ、ちゃんと挨拶してくれるのって。なんて考えてると、誰かが僕に抱きついてきた。」

「ゆかりん、おはよ〜っ！ 遅かったじゃないのお〜」

「こ、この香水の香りは……っ。」

「わああっ、淑生さん！ は、離れて下さい！」

「ええ〜？ なんでえ？ いいじゃないの別に。スキンケアよスキニシップ」

「そう言っつて腰に手を回してくる女の人は、水宮淑生さん。明るくて美人なんだけど、スキンケアが過激というか、やけにベタベタしてくる。」

「嫌なわけじゃないんだけど、ここは職場だし、モラルというものがあるでしょうっ。逆セクハラだよこれ！」

「視界の隅で春希ちゃんがおろおろしてるのがわかる。だ、誰か助けて〜！」

「おやおや、水宮君、放しておあげなさい。海宝君が困ってますよ」
僕の心の悲鳴が聞こえたのか、窓辺で外を見ていた中年の男性が、
ここにこ笑いながら近づいてきた。

「ん、天さんに言われたら仕方ないわね」
淑生さんが離れてくれる。よかった。春希ちゃんもホツとしてい
る。

文字通り天の助けで、この人は天刻てんこく柎周まさちかさん。特殊課は私服が許
可されているんだけど、天刻さんは一風変わっていて、いつも着物
を着流している。

今時、着物なんて旧い名家の人や田舎村の老人くらいしか着ない。
僕だつて着物を着ている人を見たのは、天刻さんが初めてだった。
それと天刻さんは襟に片腕を入れる癖があるんだよね。これで口
にはっぱとかくわえたら、時代劇にでも出てきそうな……

「よお、ゆか。遅かったじゃねエか」

ソファーに寝転がっていた男性が、体を起こしてにやつと笑う。
耳や口にくつつものピアスをつけていて、よく見れば両手の指に
は、髑髏やら剣やらをかたどったたくさんの指輪。

胸元の空いた柄シャツを着ていて、そこから覗くのも髑髏のペン
ダント。

どう見てもチンピラかヤクザにしか見えないこの人は火群ほむら景朗かげらうさ
ん。見た目はあれだけど、一応たぶんきつと優しい人。…ていうか、
「火群さんっ、『ゆか』って呼ぶのやめて下さいって何度も言っ
てるでしょう!? ただでさえ女みたいな名前なのに、余計女みたい
じゃないですかあ!」

「チツ。んじゃあ何度も言い返すが、俺は呼びたいように呼んでる
だけだ。文句言うんじゃねエ」

ぎらりと睨んでくる火群さん。こここ怖いっつ。本人は睨んでる
つもりはないらしいんだけど、怖すぎです! あああ、春希ちゃん
も怯えてるよ……

「それよか、来たなら目覚ましにコーヒ―淹れてくれや。俺ア、昨

夜泊まり込みでよ、寝たのはつい三時間前なんだ」

あくびを噛み殺す火群さんに、僕は仕方なく隣の給湯室に向かう。ここで何か言い返そうものなら本気で睨まれる。下手したら拳まで飛んできそうだ……

春希ちゃんがついてきて手伝ってくれた。なんていい子なんだ春希ちゃん！ 確か十八歳だったよなあ。でも、年の割には小さくてよくついてくるから、まるでヒヨコみたいだ。

ヒヨコ…いいよねヒヨコ。黄色くてふわふわで小さくてさ。鳥は全般的に好きだなあ。へへへ。

……はっ、コホン、別に僕は変態じゃないからね！

人数分のコーヒーカップをトレーに乗せて隊員室に戻る。女性陣の分は春希ちゃんが、男性陣の分は僕が持つていく。

「お待たせしましたー。はい、火群さん」

「おうよ」

「どうぞ、天刻さ…わっ」

天刻さんにカップを渡そうとしたら、トレーの上に乗っていた僕のカップがひとりでに浮いた！

カップは中身が零れないようにゆっくりと、ソファでゲームをしていた女の子のもとへ。女の子はカップを手にとるとおもむろに

……

「わーっ、真愛良ちゃん待って！ それ僕のー！」

おもむろにコーヒーを飲もうとする彼女。ゴスロリ服を着ていて、明らかに場違いのようだけれど、れっきとした僕のお仲間きのしたで、木下真愛良ちゃんって言うんだ。

慌てる僕に、真愛良ちゃんはなんでもないかのような顔で、

「それが？」

「それがって……」

「だからね、それは僕がいつも使ってるカップだから…その……」
「君が飲んだら間接キスになってしまっわけで…」

「間接キスになっちゃっう？」

「あ！ だからね……っ」

「いいよ別に。まいら、紫ちゃんもだつたら間接キスになつても」
クスツと笑う真愛良ちゃん。いやいやそれは困るよっ！ モラル的に！ そう、職場のモラル的に！ 決して嫌なわけじゃなく！
「君がよくても僕がダメなの！」

強く言つと、真愛良ちゃんはきよとんとしてから、困つたように上目遣いで僕を見る。

「紫ちゃん、まいらと間接キスするの、イヤなの？」

「！」

うつつ、そんな顔されたら余計に困る！

……はっ。気づくと全員がじつと僕を見ている。面白そうにんまりとした顔で。

ただし、春希ちゃんを除いて。春希ちゃんはなぜか泣きそうな顔をしている。

どどど、どうすればいいんだあ〜っ！？ なんでこんなことになつ。今度は天刻さんも見てるだけだしいいいっ！

トレーさえ持っていなければ頭を抱えて悶絶したい僕の横で、突然男の人の声がした。

「そこまでにしてやれ、木下。海宝がかわいそうだ」

「ぎゃあっ」

驚いて思わずトレーを落としそうになつた。あ、危ない……っつて、

この低音は……

「土師さん！？ いたんですか！？」

「ああ、いたよ。さつきから」

誰もいないはずの僕の隣から声がする。勘違いしないでね、別に僕の妄想だったり、ユーレイとかじゃないから。ちゃんと僕の隣に人がいるんだ。見えないだけで。

「なんで透明化してるんですか！ 仕事じゃないんですから、わざわざここで透明化しないで下さいよ！ ビックリするじゃないですか」

「いや：お前を驚かそうと」

「充分驚きました！ ハイ！！ 心臓バクバクのドクドクで飛び出しそうです！ だから透明化解除！ ちゃんと姿見せて下さい！！」
たぶんこの辺りにいるだろうとあたりをつけて声を張り上げる。
まったく、みんなイタズラ好きなんだから〜っ。

「ごそごそと動く気配があり、ややあつて、すうつと中年の男性が姿を現す。

彼は土師昂行さん^{たかゆき}。見ての通り：彼は透明化できる、つまり透明人間なんだ。

さっきの真愛良ちゃんを思い出してくれば、なんとなく気づく人がいるかもしれないけど　ここ、特殊課は不思議な能力^{ちから}を持っているヒトたちがいる課なんだ。

特殊課所属のヒトはほぼ全員、異能者や人外。もちろんここにいるヒトたちもそれぞれ、異能者や人外だったりする。

異能ってというのは、一般的には超能力とか霊能力のことだけど、他にもいろんな能力があつて、研究している人はたくさんいる。で、異能を持っている人を異能者って呼ぶんだよ。

人外は人間とは違う種族のことで、妖怪とか人狼とか悪魔とか：まあ、人間以外ならなんでも。

人外はたいいてい、人間に変化^{へんげ}して人間社会に溶け込んでいるから、パツと見ではそれと分らない。

まず、最初に登場した春希ちゃん。彼女は異能者で、“声魅”^{こえみ}を使う。

“声魅”は声で相手を操る能力でね、声さえ届けられれば誰でも操れる。

でも、春希ちゃんは能力のコントロールがあまり得意じゃなくて、しゃべると能力を使ってしまうことがあるから、スケブで会話しているんだ。

春希ちゃんとは一年半一緒にいるけど、声を聞いたのは能力を使った時ぐらいで、数えるくらいしかない。

不便だろうし、何よりきれいな声してるのに、もったいないなあ
って思う。

次は淑生さん。淑生さんは人外で蛇神^{へびがみ}。今の姿は仮の姿で、本当の姿は白くて大きな蛇なんだ。僕は一回しか見たことないんだけどね。

蛇神は水神^{すいしん}でもあつて、水を操ることができるんだって。

そうそう、蛇って冬眠するでしょ？ 淑生さんは蛇って言っても一応神様だから、冬眠とまではいかないけど、冬場は活動が鈍くなるんだ。

あとね、脱皮もするんだよ。たま〜に、抜け殻が落ちてたりしてビックリするんだよね〜。脱ぎっ放しにしないでちゃんと自己処理してほしいよ。

天刻さんは異能者で“魔眼^{まがん}”を持つてる。“魔眼”は目を合わせた相手に幻覚を見せることができる能力。

効き目の長さは自分で調節できるらしいんだけど、最長で二十四時間。

火群さんも異能者で“発火”能力者。体から自在に火を出すことができる。偶然だけど、名前通りというか、なんか『らしい』能力だよね。

自分で火が出せるなんて、ライターいらないし、いざって言う時は懐中電灯の代わりにもなるし…遭難した時とか火を起こすのに便利だよな。一番実用性があるかも。

真愛良ちゃんも異能者だね。“念動”能力者。この能力は結構有名だから、知ってる人もいるんじゃないかな。

手や道具を使わずに、遠く離れた物とかを動かすことができる能力。自分の体を浮かせることもできるみたい。

そして土師さんも異能者で、“透化^{とつか}”能力者。さっきも言ったように透明化ができるし、あらゆるものをすり抜けることができるんだ。

土師さんの体と密着していれば、服とかも一緒に透明化したり、

すり抜けることもできるんだって。

便利と言えば便利だね。ドアを使わなくても壁をすり抜けられるから、急いでる時とか楽かも。

以上がみんなの能力。どうして特殊課が特殊だと言われるか分かったでしょ？

それにね、異能者や人外は世界中にいるけど、差別の対象にもなってるから、快く思っていない人もいる。だから、特殊課に所属してるって言うといい顔されないんだよね。

もちろん、常人でも彼らを受け入れる人はたくさんいる。僕だって彼らに偏見はないしね。

え？ 僕は常人なのにどうして特殊課にいるのかって？ それはね……

「よし、全員揃ったところで、いつものアレやろうや」

火群さんが僕を見て楽しそうに言う。他の人たちもなんだかやる気満々です。僕は小さく肩をすくめた。

「分かりましたよ。じゃあ、今日は誰やります？」

「昨日は天刻のオッサンだったよな」

【その前は私でした…】

「土師君はいかがです？」

「いや、オレはいい」

「今日はまいらがやる！」

「え〜っ、あたしもやりたーい」

正直、誰でもいいんだけど…真愛良ちゃんや春希ちゃんだと、身長的にちよつと難しいんだよね……

みんなはジャンケンで決めるみたいだ。何回かあいこが続いて……「やったあ、まいらに決まりいっ」

真愛良ちゃんか。ちよつときついけどできなくはないし。

なんだか淑生さん、すごく残念そうだな。そんなにやりたかったのかな……まあいいや。

「えーと、着替えて着替え……と」

僕はロツカーから服を二着出して、真愛良ちゃんと一緒に給湯室へ移動。ここでしか着替えられないからね。

僕と真愛良ちゃんはそれぞれ、新しい服に着替える。あ、もちろん着替えは見てないからね！ 背中合わせになってるから見えないって！

着替え終わった僕たちは、みんなの前に戻る。途端に歓声が上がった。

「おおーっ、さっすが！」

「相変わらずお見事ですなぁ」

「ホント、そっくりでまるで双子みたいだわ」

今の僕は、真愛良ちゃんとまったく同じ外見してる。

服は着替えたから、僕も真愛良ちゃんもさっきまでと違うけど、ゴスロリ服であることに変わりはない。

「今日こそは当ててやる！」

「質問一。名前は？」

「木下真愛良。花も恥じらう十七歳ですっ」

示し合わせたわけでもないのに、僕と真愛良ちゃんは同時に同じ答えを、しかも全く同じ声で返す。

顔も声も体格も瓜二つ。これが僕の特技。いわゆる変装って奴。

顔は特殊マスクで、性格も完全にトレース。一度聞けば声も真似られる。

この特技が認められて、僕は常人でありながら特殊課にいるってわけ。

で、ほぼ毎日の日課みたいになってるのが、この『どっちが本物でしょうかゲーム』。

僕が誰かに変装をして、どっちが本物が当てるんだ。質問は三回まで。解答権は一回きり。

一度暇つぶしにやってみたら、みんなハマっちゃってね……ま、僕も楽しいからいいんだけど。ちなみに、これまで当たったことはほとんどない。

【質問二。好きな色は？】

「黒と赤！」

変装中は相手になりきるし、情報も調査済み。この程度はお手の物。でも、それくらいはみんなも知ってるから、鍵を握るのはいつも最後の質問。

「では質問三。今朝の朝食のメニューは？」

さすが天刻さん。難しい質問を……でも、嘘はルール違反だから正直に答える。

「えーと、ご飯とわかめのお味噌汁とサバの味噌煮。あと食後にヨーグルト！」

「今日は時間なかったからシリアルで済ませちゃった！」

答えが分かれた。どっちかが僕で、どっちかが真愛良ちゃんだけど……みんなは頭を寄せ合って真剣に議論する。

「なかなか難しいわね……」

「私は右だと思えますがねえ」

「そうかあ？ 左じゃね？」

【私も左かと……】

「オレは天刻さんと同意見かな」

「うーん、左かしら」

「いや待て、やっぱり右……か？」

「左も捨てがたいですよねえ」

【でも海宝センパイ、来るの遅かったし……】

「そうなのよね、だから朝はパパッと済ませたかもしれないし……」

「けど、海宝は几帳面だからな……」

「しっかり食べてきたかもしれませんねえ」

「ぐああッ、悩むぜ！ 右か！ 左か！」

当たる確率は二分の一なんだから、そこまで悩むことないと思うけど……僕と真愛良ちゃんは顔を見合わせた。

「……じゃ、決まりだな」

土師さんの静かな声。どうやら結論が出たらしい。代表で火群さ

んが、ぐつと前に身を乗り出して答える。

「本物の真愛良は……左だ！」

びしつと、向かって左側を指差す火群さん。まるで、「犯人はお前だ！」って言う探偵のように。見た目はヤクザみただけ……

「残念でした！ 左は僕です」

「ぐああッ、やっぱ右だったかア！！」

「おやおや」

【また不正解ですね…】

「当たらないな」

「あーん、シヨックウ」

マスクを外した僕に、みんなは悔しがったり残念がったり。ちなみに、シリアルで済ませたって言った方が真愛良ちゃんだよ。

この職場はいつもこんな感じ。明るくて、楽しくて、ちよつと騒がしい。

世間の人は特殊課の人を嫌ったりもするけど、僕はこの人たちが好きだ。同じ職場の仲間だしね。

いつもながらの風景になごんでいると、ドアがノックされて、次いで自動ドアが開いた。

「邪魔するよ。 おや、紫くん、可愛い格好をしているじゃないか」

そ、総隊長！？ そうだった！ 今日は総隊長が来るからいつもより出勤時間が早かったんだった！

わーっ、ていうか僕、真愛良ちゃんに変装してゴスロリ服着たままあああああつ！

「あ、いや、これはそのですね総隊長！！ いつものアレをやっていたわけでした…っ」

「そうか、だったらもう少し早く来ればよかったかな。私も参加したかったね」

「そ、総隊長」

ああ、絶対楽しんでるよ、このお人は……

この人は警吏隊総隊長の榊原陽向さんさかきはるひむか。総隊長つて言うのは、警吏隊の中で最高位である総帥に次ぐ位なんだ。

僕とは一回りくらいしか年が違わないのにすごいよね。

総帥は全警吏庁の長官で、総隊長はここ、総本部の長。つまり、とにかく偉い人！ なわけなんだけど……

「うん、よく似合っているね。今度からその格好で出勤したらどうだい？ 君たちは私服許可されているんだし」

この格好で！？ 嫌だあーっ！ これは変装してなりきってる時は着れるわけで、変装していない時はものすっごく恥ずかしいんですー！

「私の目の保養にもなるしね」

何それ！？ そんな満面の笑顔で言われても困る！ ていうか、男の女装見て保養も何もないでしょお！？

僕が呆然としていると、淑生さんが僕の背中に隠れるようにして、総隊長を睨みつけた。

「ちよつと総隊長！ あ、あんまりゆかりんをいじらないですよ。ゆかりんをいじっているのはあたしたちだけなんだからっ」

「ええーっ！？」

何それ！ そんなの許可した覚えないんですけど！ 淑生さんは総隊長に怯えながらも、威嚇を続けている。

総隊長はにっこり笑って、斜に構えた。

「紫くん、人気者だね。けれどね、淑生くん。紫くんは私の部下だから、何をしてもいいんだよ」

「はい！？」

そんな理屈聞いたことない！ 僕は抗議しようと口を開きかけたけど、何か言う前に淑生さんが震える声で言った。

「そ、そんなの横暴よ！ 職権濫用だわっ！ 立場が上なら何をしても許されるなら、あたしだってゆかりんの先輩だから何をしても許されるわ！」

…確かに淑生さんの方が先輩だけど…その理屈も間違ってると思

います。

「紫くんをいじるのに、君の許可が必要という決まりはないと思うんだけどなあ。独占欲が強すぎると嫌われてしまうよ?」

笑みを浮かべたまま余裕の総隊長に対し、淑生さんはぐつと言葉に詰まって、ビクビクしながら悔しげに総隊長を見据える。

なぜか淑生さんは総隊長が苦手、というか怖いらしい。淑生さん曰く、『本能的に嫌』ということなんだけど、理由は定かじやない。蛇神の淑生さんが怖がるなんて、総隊長、何者?

入隊してからずっと気になってるんだけど、総隊長って常人なのか異能者なのか、そもそも人間なのかどうかも怪しい。

詳しいことは誰も知らないし、総隊長は警吏庁の謎の一つなんだ。それに、総隊長の言動はどこまで本気かよく分からない。まるで雲みtain人なんだよね。

つかみどころがないって言うか。でも、総隊長のすごいところは

……

「榊原さん、お遊びはそこまでにしてご用件をどうぞ」

「ふふふ、そうだね、柎周くん。お遊びは終わりにして本題に入るうか」

ベテランであり、年上であるはずの天刻さんを名前です！ しかも

『くん』付けしちゃうところっ!!

長い付き合いらしいけど、いまだにドキツとするんですけどーっ。天刻さんがくん付けなんて……

「みんな、こつちへ。総帥から直々に捜査の依頼を頂いているんだ」

総帥から!? 誰もが息を呑んだ。総帥直々だなんて、よほど大きい事件ヤクなんだろうか。僕たちはソファーの方へと移動した。

総隊長が二十五センチくらいの犬……いや、総隊長曰く狼(らしい)のぬいぐるみをテーブルの上に置いた。

そして、ぬいぐるみが抱えている、お菓子のパッケージみたいなものの表面に一つだけついているボタンを押す。

「総帥、準備が整いました」

《…ああ、やつとか。遅かったね》

ノイズの後に、男の人と女の人が同時にしゃべっているような声が聞こえてきた。

総帥は決して人前に姿を見せない謎の人。顔も性別も年齢も一切不明。

かろうじて『円藤』^{えんどう}という名字だけは分かっているけれど、下の名前は誰も知らない。

誰かと話す時は、この狼ぬいぐるみについている通信機を使うんだ。

総帥の正体は警吏庁最大の謎。警吏隊士の中で、総帥と直に会ったことがあるのは榊原総隊長だけ。

でも、絶対に総帥について教えてはくれない。ベテランの天刻さんでも知らないらしい。

「いやあ、すみません、総帥。紫くんがあまりにも意表をついた格好をしていたものですから、つい遊んでいました」

はっ。そういえば僕、まだ着替えてないっつ。ど、どうしよう！
《意表をついた格好？》

…でも総帥には見えてないからいつか…

「はい。実は今、紫くんはゴス…」

「わーわーわーわーっ！ 何言っつもりですか総隊長！！」

僕は慌てて総隊長を部屋の隅へと引っ張る。総帥に聞こえないように声をひそめて、

「いいじゃないか、可愛いんだし」

「よくありませんっ！！」

と言っても、総帥は僕の特技を知ってるけど…ゴスロリ服を着て
ることはなんとなく知られたくない。

《どうしたんだ？ 陽向》

「いいえ。紫くんの変装技術はすごいなあということですよ」

《当然だよ。君が見込んで私が惚れ込んだ才なのだから》

はっ。なんとかごまかせたみたいだ…総隊長の言動にはいつも

驚かされると言うか、落ち着かないよ……

《さて、君たちに依頼したい捜査の件だが…今はまだ大きな事件にはなっていないが、ある町でとある共通点を持つ人たちが襲われるという事件が発生している》

総帥の声が真剣みを帯びた。僕たちも自然と気を引きしめて、耳をそばだてる。

《襲われたのはこれまでに二人。事の発端は一週間ほど前だ。彼らは大学の登山サークルの仲間で、事件が起こる前日に登山を楽しんでいた。

その日は特に変わったことはなく、無事に下山したが、翌日、仲間の一人在何者かに襲われたそうさ。最初の被害者が言うには、それは大きな火の玉だったと》

火の玉？ 鬼火だろうか。それとも火の恠妖あやしか。

《被害者は炎に巻かれたが不思議と熱さは感じず、衣服が燃えることもなく、火傷はなかったとのことだ》

へえ、不思議なことがあるんだな。そう思っていたら、僕の隣にいた淑生さんが微かに眉をひそめ、思案顔になった。何か気になることでもあったのかな。

《ただ、炎に巻かれた時、声を聞いたそうさ。「許さない」という声を。火の玉は何かを探るようになりみついてきたが、すぐに「違う、おまえじゃない」と言う言葉を残して消えた。

そしてその二日後、同じく仲間の一人が同じような被害を受けた。二人目の被害者も、最初の被害者同様の声を聞いたということだが

……》

火の玉に意思がある？ と言うことは、やっぱり火の恠妖 人外の仕業か。

僕たちが担当するのは、異能者や人外が関与している事件。

だけど、それらが関わってる事件はあんまり起きないから、他の課の応援に出されることの方が多いんだよね。でも、今回は本業の方みたいだ。

「…その火の玉の正体って……」

それまで黙って考え込んでいた淑生さんが口を開いた。みんなの視線が淑生さんに集まる。

《何か気づいたのかな?》

「ハイ。たぶんその火の玉は、火鴉ほのあだと思います」

ほのあ? 初めて聞くな。僕は恠妖とかつてあんまり詳しくないし…淑生さんは人外だから、やっぱりそういうことに詳しいのかな。淑生さんは僕の表情からそれを読み取ったようで、にっこり笑って説明してくれた。

「火鴉は北洋の神話に出てくるフィリユネのことよ」

ああ、フィリユネなら知ってる。確か、炎の体を持つ鳥だった気が。

「東洋ではフィリユネのことを火鴉って呼ぶの。神話にあるように、火鴉は聖獣。温和でおとなしくて、人間を襲うことなんてないはずなのに……」

淑生さんは表情を曇らせた。それが本当なら、火鴉はどうしてその人たちを襲ったんだろう。

人外が人間を襲うのは、人間を憎んでいるからとか、遊び半分だとかいろいろあるけど…火鴉は聖獣らしいから、何か理由があるのかもしれない。

《さすが水宮。同族に詳しいね。できればこの件を担当してもらいたいんだけど》

「ハイ! 総帥直々の依頼とあらば従います」

《それからあと二人ほど欲しいな》

うーん、人外相手かあ。気になると言えば気になるけど……

「まいらはイヤ」。人外とは相性悪いもん」

【私も少し怖いです…】

真愛良ちゃんと春希ちゃんはパスか。あとは……

「俺ア行くぜ。炎野郎が相手なら、俺の灼熱でとっちめてやらア」
バシツと拳を手のひらに当てて意気込む火群さん。やる気満々だ

なあ。

「私は残りましようかねえ。いつ他の事件が入るかもしれませんし」

「オレはどっちでもいいけどな……海宝はどうする？」

「え、あ…そうですね……」

どうして大人しい火鴉が人を襲ったのか気になるし、行こうかな。ちよつと不安なメンバーだけど。

「行きます」

力強く頷くと、総隊長がにっこりと笑った。

「ふふ、決まりだね」

《それでは、水宮隊士》

「ハイ！」

《火群隊士》

「はいよ」

《海宝隊士》

「はい！」

《事件解決に尽力したまえ！》

「了解！」

総帥の声に僕たちは敬礼し、事件現場へと急いだ。

巻（後書き）

追伸列記簿

皆様、初めまして。甲斐日向です。前作『マジカル ラビリンス』（略して『マジラビ』）からの方はお久し振りです。

前作からだいぶ経ってしまいました。が、ようやく第二作をお届けできました。前作に続いてタイトル長くてすみません。『特殊警吏 隊士 海宝紫』略して『特ゆか』です。

このお話はマジラビ中間あたりを書いている頃に、突発的に考えついたものです。話もキャラも難産でした。特に困ったのが後半です。

前半までは話が思いついたんですが、途中から思うように進まず「あーもう誰か書き書いてくれ」なんて現実逃避したり。

冬休み中も漫画やゲームに目移りしながらちよこちよこ進めてたんですが……今頃になって完成。いやはや。

えー、お気づきだとは思いますが、この話ではオリジナル設定が多く存在しております。

いやむしろ、僕の話でオリジナル設定でない物など、ほぼ無いに等しいわけで。なので「あーこれ違うー」とか「へえ、こういうものなんだ」とか思わないで下さいね。あくまでこの世界での設定です。

ゆかりんたち警吏隊というのは、まあ言うなれば警察です。様々な事件を捜査 解決、イエーイ ゆかりんたちは他の事件の応援に出されることの方が多いですが……

この世界では、神や魔物などが空想や伝説上ではなく普通に実在し、人間社会の中に溶け込んでいる者もいます。ファンタジー要素が強いですが、イメージとしては現代日本、いや、近未来日本です。まあ、詳しい設定や説明などは、僕が運営中のオリジナルサイト

に行っていただければ分かります。読者必見ですのでよろしく。
一人称での小説は確かきつと初めてなので、書くのに苦労しました。

あくまでも主人公が考えていることなので、あまり詳しい人物描写などができないものですから。一人称描写は時々でいいと思います。

さて、最近は年始ということで、現実的に仕事が忙しく、長残業の毎日です。でも僕はまだマシな方のようにです。

他の職場では僕の倍近く残業しているようです。つらい、つらいね。寒いし腹減るし眠いし、疲れてくるとイライラしません？

そーいう時どうすればいいんでしょう。仕事なので気晴らしに遊んだれーなんてできませんね。ううむ。

そんなこんなで、長丁場の末に出来上がった作品です。よろしければ寛大な心で感想など頂けると嬉しいですよ。

それでは、次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

貳

最初に被害に遭った酒井伸彦さかいのぶひこさんは、角刈りのスポーツマンといった感じ。

家を訪ねて事件のことを訊くと、酒井さんは不思議そうに、しきりに首を傾げていた。

「いやー、ほんと突然だったんですよ。仕事から帰る途中でね、夜道を歩いていたらいきなり目の前に、火の玉がぼわつと現れて」

「で、例の言葉を聞いたんですね？」

淑生さんが代表で問いかけると、酒井さんは肩をすくめた。

「そうなんですよ。熱さを感じませんでしたけどパニックっちゃっててね。必死こいて火を消そうとしてたら聞こえたんです」

「…その炎の色は、何色でしたか？」

「色？ うーん、黄色…オレンジ？ ですかね。よくは覚えてません。何せ頭が真っ白になってましたから」

「そうですか。ありがとうございます」

酒井さんにお礼を言い、二番目の被害者を訪ねた。なかやまいさお中山功男さんは窓際のサラリーマンといった感じで、事件の話をするとき蒼い顔をした。

「あの日は給料日で…それを狙った強盗の仕業かと思いました。あの時のことはほとんど覚えていません。声は聞きましたけど、もう恐ろしくて……」

そう言っって頭を抱える中山さん。気弱そう…というか胃が弱そうだなこの人。なんかトラウマになっちゃってるみたいだし。

まあ、いきなり体に火がついたら驚くよね。僕でもパニック起こしそう。

「では、炎の色も覚えていませんか？」

またこの質問だ。炎の色が重要な手掛かりなのかな？ でも、中山さんは頭を抱えたまま首を横に振る。よほど怖かったんだろうな。

これ以上はなんの情報も得られないと分かったので、僕たちは次に狙われるだろう最後の登山メンバーを訪ねることにした。

その人の自宅に向かう道すがら、僕は淑生さんに訊いてみた。

「あのー、淑生さん。さっきから炎の色を訊いてますけど、あれって何か重要な手掛かりなんですか？」

「ん？ ああ、火鴉の炎はね、精神が普通の状態だと緑色、興奮した状態だと黄色になるの」

「はん、それで色を訊いてたのか。さっきのオッサンは使いもんにならなかったが、初めの奴ア、オレンジだか黄色だか言ってなかったか？」

「そうですね。ということは、火鴉は興奮状態だったってことですか？」

「そういうことになるわね。しかもオレンジに近かったってことになると、かなり激しく興奮してると思うわ。一体、何があったのかしら」

疑問は膨らむばかりだ。気性が穏やかな火鴉は、よほどのことがない限りそこまで興奮することはないらしい。

なら、人間の方に何かしら過失があったんだろうけど…被害者も混乱しててまともに原因は分からないし、あとは火鴉本人に聞くしかないよなあ。

諸星史也もろほしむみやさんはまだ被害に遭っていない、最後の登山メンバーだ。火鴉が次に襲うのはきっと彼だ。

豪邸ってほどではないけど、結構広い家だ。諸星さんはここに一人で暮らしているらしい。

通された客間も広くて、マンションの僕の部屋より広い。うらやましいなあ……

一連の事件の話を見ると、諸星さんは難しい顔でため息をついた。眼鏡をかけていて生真面目そうな人だ。

「そうですねか…そんなことが。で、次に狙われるのは私ということなんですね」

「ええ、何か心当たりはありませんか？」

「その火鴉とか言う奴に狙われる理由ですか？ さあ…あの時は彼らと一緒にいつも通り山に登って……」

その時の記憶を手繰り寄せるように、諸星さんは目をつむって天井を仰いだ。

「珍しい花がないか探してたんですね……」

「花？」

「ええ。私は花が好きでね」

目を開け、諸星さんは壁の額縁を指した。

「気に入った花をああして、額や花瓶に飾ったり、育てたりしているんですよ」

特に触れようとしなかったけれど、この部屋にはは花がたくさん飾られている。

花瓶も一つや二つじゃないし、額縁には押し花が、はく製の蝶のようにきれいに並べられている。

「見てもいいですか？」

「構いませんよ」

近くで見ると、本当にいろんな花がある。僕は花とか詳しくないからほとんど分からないけど、よく見かけるものからまったく見たことないものまで。よくこんなに集めたなあ。

淑生さんは女性なだけあって少しは花の種類が分かるのか、諸星さんと花についていろいろ話してる。

火群さんは……あ、やっぱり全然興味なさそう。思いつきりどうでもよさそうな顔してるよ……

「ああそうだ。確か帰り際に花を摘んで帰ったんですよ。珍しく薄緑色の花でして、調べるために持ち帰ったんです」

「え、緑色の花なんてあるんですか？」

ちよっと気になる。僕が問いかけると、諸星さんは得意げな顔を

した。

「まだ蕾なのかもしれないけれどね、見てみるかい？」

「いいんですか？」

緑色の花なんて見たことがない。興味をそそられた僕だけど、火群さんにうんざりした顔で待ったをかけられた。

「おいおい、俺たちが何しに来たのか忘れたのか？ ゆか。俺たちは花を見に来たんじゃなくて、事件の捜査に来たんだろうが。花なんざ事件解決した後にも見るや」

「うっ…ごめんなさい」

「そうだったわね、うっかり忘れてたわ。それでは諸星さん、いつ火鴉が襲ってくるとも限りませんので、私たちがしばらく警護します。よろしいですか？」

「ええ、分かりました。お願いします」

「それじゃあゆかりん、いつものようによろしくね」

淑生さんにはっこりと笑った。

諸星さんに変装した僕を見て、本人は呆気に取られていた。

いつものように、僕は身代わりとして変装した。たいてい僕の役回りは身代わりなんだ。

今回は、僕が囷になって火鴉の気を引いているうちに、火鴉を捕獲することになった。

火鴉は聖獣だから殺すわけにいかないからね。本物の諸星さんは淑生さんが守ることになってる。

「安心しろ、ゆか。ほのかだかトロワだかが来ても、俺が振り返ちにしてやっからよ」

「火鴉ほのあですよ！ なんですかトロワって！ それに振り返ちにしちゃダメです！」

不安だなあ…火群さんのことだから、本気で振り返ちにしちゃいそうだよ。いくら人外でも聖獣を殺したら犯罪なんだから。

火鴉の目につきやすいように庭に出て、僕は花壇を見ていた。庭もすごく広くて、そこにある花壇も大きい。花壇というより花畑だな、こりゃ。

「来るかなあ、火鴉」

今日来なかったら、毎日ここに張り込まないといけないんだよね。嫌じゃないんだけど、なんか落ち着かないんだよね、この家。広すぎて。

「火鴉よ来ーい。…なーんちゃって」

まったりと花畑のそばにしゃがみ込んで僕がそう呟いた時だった。ひらりと、火の粉が僕の目の前に落ちてきた。

「…火の粉？」

「ゆか！ 上だ！」

火群さんの声に僕が頭上を見上げると、青白い体のカラスに似た大きな鳥が滞空していた。

広げた翼は炎そのもので、ちらちらと青白い火の粉が落ちてくる。ほ、ほんとに来たー！

「あ、あれが…っ」

「出やがったなホンダ！ 俺サマの炎を喰らえエエツ！」

「ってちよつとー！？ 何やってんですか火群さん！ ホンダじゃなくてほの」

最後まで言う前に、火群さんが放った炎の渦が火鴉を飲み込んだ。熱風が強く吹きつけ、火が間近まで迫る。

「あーつつつう！ 火群さん！！ 僕まで火ダルマにする気ですか！！」

「ククク、炎は芸術だぜ？」

あ、ヤバい。目が血走ってる。もーっ、これだから火群さんと一緒にの捜査は嫌なんだよおつ。誰か助けてー！

…って、はっ、火鴉は大丈夫なのか！？

慌てて火鴉を見る。けれど無用な心配だったみたいだ。火鴉はまったく効いていない様子で、炎の渦を打ち消してしまった。

「チツ」

「チツじゃありませんよ！ 無事だったからよかったものの、火鴉が死んだらどうするんですかあ！」

「犯罪者に同情なんざいらねエ。俺の炎で叩き潰すのみ！」

「警吏隊士が何言ってるの！？」

確かに犯罪者は許せないけど、火鴉はまだそうと決まったわけじゃないし、当初の目的忘れてるの火群さんの方じゃないか！ この人ただ暴れただけだよ！

淑生さんに助けを求めようとしたその時、火鴉が急降下してきて口から炎を吐いた。

炎は僕の体を包み込み、僕の周りにだけ炎の壁が出来上がった。

「うわあああああっ！」

「ゆか！！」

さほど熱さは感じない。でも、少しだけ熱は伝わってきて地味に暑い。

火ダルマになってるはずなのに、不思議な感覚だ。これが火鴉の炎なのか。

心配を感じて、僕は正面を見た。僕の身長は何倍もある大きな鳥が、僕を見下ろしていた。

…ない…許さない…

頭の中に直接、声が聞こえる。火鴉の声？ 予想していたよりもかわいい声だ。まだ小さな子供のようない声。

許さない…人間…

どうして？ 何が許せないんだ？ どうして君は…そんなに悲しそうな声をしているんだ？

「チツ、壁を作りやがったか。炎比べってか？ いい度胸じゃねー

か鳥公。そんな壁、俺の炎にかかれば……」

「何やってんのよ、ほむらん！」

ククク……と危ない笑みを浮かべていた火群の頭を、淑生がハリセンではたいた。

「つてーな！ 何しやがる！」

「我忘れてんじやないわよ！ 騒がしいと思ったら火鴉が来てんじやない！ 火鴉が来たら呼べって言ったでしょ！？ それにゆかりんはどこ！？」

「ゆかはおん中だ。さつき鳥公に捕まった。だから今、俺サマの炎で……」

「バカ言わないでよ。あんたの炎で火鴉に敵うわけないでしょ？」

それに、万が一その炎が中のゆかりんに当たったらどうするのよ」

もう一度すぱん、とハリセンで火群を叩く。

「俺はモグラ叩きのモグラじゃねえ！ 何度も頭叩くな！」

「ここはあたしに任せなさい。なんたってあたしは蛇神 水神だもの」

僕は炎に包まれながら、火鴉と対峙していた。火鴉は僕を見下ろし、伝えてきた。

返せ……盗んだもの……ずっと探していた……

「盗んだもの……？」

そうだ……おまえだろう。わたしから、大切なものを奪った人間……諸星さんが、火鴉から大切なものを奪った？ そんなことをするような人には見えなかったけど。

返せ……わたしの……大切なもの……

「何を盗まれたんだ？」

とぼけるな！

炎の勢いが増す。オレンジ色の炎は、容赦なく僕を襲う。蒸し暑くて汗ばんできた。まるでサウナだ。

火鴉は怒ってる。諸星さんに大切なものを奪われて。それは何？
おまえが奪った！ わたしの大切なもの！ 返せ！ 返せ！！
「落ち着いて、火鴉。教えてくれ。なんなんだ？ その大切なもの
って」

なるべく優しく問いかけると、ややあつて沈んだ声が返ってきた。

……花……

「え？」

花を…盗んだだろう

「花…って」

もしかして、諸星さんが言ってた緑色の花？ でもあれがなんだ
って言うんだらう。

返せ…あれはわたしの大切なものだ。あれは……

不意に、僕の顔に冷たいものが落ちてきた。この炎の中でそれだ
けは冷たく、僕の頬を伝って滑り落ちていった。

それは涙だった。火鴉の涙。そして、微かに聞こえた悲しみに満
ちた声。

ああ、そうか。君は……

大切な子供を奪われて、泣いていたんだね。

急に炎の勢いが増して、淑生は怯んだ。炎が周囲に燃え広がるこ
とはないが、あまりにも炎の勢いが強い。

そのせいか、熱さを感じない火鴉の炎でも熱が伝わってくる。こ
の炎の中心にいる紫は、さぞ苦しいことだらう。

(こんなに怒り狂ってる火鴉なんて初めて見たわ……)

吹きつける熱風で淑生の髪がはためく。髪を手で押さえ、淑生は
手を前に出して水鉄砲を放った。

しかし、炎の壁に当たると水はすぐに蒸発した。

「まだ弱いか……これならどう!？」

さらに強い水鉄砲を撃つ。一瞬だけ炎の壁が分断されて、奥にい

る紫　変装しているので、格好は諸星の格好だが　の姿が見えた。

「ゆかりん！」

だがすぐに炎は再び、彼と淑生たちを隔ててしまう。

「おいおい、得意げにしゃしゃり出てきた割りにはどうしようもなつてねエじゃねエか」

「しゃしゃり出るですってえ！？　あんたに言われたくないわね！見てなさいよ、あたしの実力はこんなもんじゃ……」

売り言葉に買い言葉、淑生が本気を出そうと意気込んだ時、炎の壁が消えた。

火鴉がどうして怒っていたのか解った。火鴉は卵を…自分の子供を取られてしまったから怒っていたんだ。

火鴉を落ち着かせて説得すると、火鴉は炎の壁を消してくれた。

火群さんや淑生さんが慌てて駆け寄ってきて…火鴉にもう一度突っかかっていこうとした火群さんを、淑生さんがハリセンでひっぱたいて、僕は諸星さんも交えて火鴉のことを話した。

「あの花が…火鴉の卵！？」

「はい。花に似ているけれど、あれは卵らしいんです」

今、火鴉は仮の姿　真っ白なガラスの姿　で、僕の肩に乗っている。ちなみに僕はもう変装は解いているよ。

卵のことは淑生さんも知らなかったようで、本気で驚いたみたいだ。

それは火群さんや諸星さんも同じで、特に諸星さんに至っては文字通り開いた口が塞がらない状態だ。

「そういうことだったのね。それじゃあ火鴉が怒るのも無理ないわ」「ガキを取り戻そうとただけかよ。…チツ」

いや、チツて何。そんな残念がることじゃないでしょ火群さん。

「……知らなかったとはいえ…それは申し訳ないことをしました」

ようやっと、といった感じで諸星さんが言う。言うなれば彼は卵泥棒なわけで、火鴉は被害者だったわけだ。

やっぱり火鴉はむやみに人を襲うわけじゃなかったんだ。よかった。

この件が世間に広まって、火鴉は人間を襲う凶暴な生き物だったことになったら、人外の印象が悪くなる。

ただでさえ、人外はみんな同じだと一括りにしてしまう人が多いから……

「火鴉は卵を返してくれさえすればいいと言ってます。卵を返してくれば何もせず立ち去ると」

「ああ、そうですね。あの花……いえ、卵は別室の花瓶に活けてあります」

卵を活けるって…変な感じだ。いや、見た目は花なんだからおかしくないんだけど。

別室へと案内されると、そこは花瓶や花の入った額縁だらけだった。まるで花の博物館……

諸星さんは奥の棚に置かれている花瓶を持ってきて差し出した。

「これです。新種かと思って調べようかと思っただけですが、お返ししますね」

差し出された花瓶の中には、一輪の薄緑色の花……というか蕾。確かに緑だ。花の蕾にしては大きくて、僕の手と同じくらいあるんじゃないかな。

火鴉は僕の肩の上から首を伸ばして、蕾に顔をこすりつけた。まるで小さな赤ん坊に顔をすり寄せるように。うれしそうだな。

「よかったね、火鴉」

僕が火鴉の頭をそっと撫でた時、蕾がプルプルと小さく震え、ふわりと開いた。

「……」

開いた花の中には、群青色の鳥のヒナがいた。う、産まれたーっ！

「…ピウ」

ヒナは親鳥の姿を見つけると、小さな羽をばたつかせて何度も鳴いている。かわいいいっつ、青いヒヨコだ！ ヒヨコ！

興奮する僕の肩の上で、火鴉は一度翼を大きく広げると、外へと首を巡らせて飛び立った。

ヒナは親鳥を目で追い、ぱたぱたと一生懸命翼をはばたかせて、よろよろと親鳥の後を追って飛び立つ。

外に出ると、火鴉は元の姿に戻った。青白く輝く身体。さっきまで違って穏やかな瞳。

夕焼け空に青白い火の粉が舞って、とても神々しく見える。

「…火鴉」

ヒナが火鴉の首の上に乗る、一声鳴くと、火鴉は空の彼方へと飛び去って行った。

こうして、謎の火の玉事件は幕を閉じた。

事件後、諸星さんは酒井さんや中山さんに火鴉のことを話したらしい。

二人とも、原因が分かって安心してたそうだ。それと、あの事件のことは世間に口外しないと云っていた。

それを聞いて僕も安心した。これで火鴉は静かに暮らせるだろうから。今頃、どうしてるのかなあ。

あ、そういえばあの後、総隊長から聞いたんだけど、総帥がこの事件の捜査を直々に依頼してきたのは、諸星さんと総帥が知人だったからなんだって！

二日前、諸星さんが珍しい花を見つけたと聞いて、あの花を見に行ったそうなんだ。

で、総帥ってはその時に、あれが火鴉の卵だって気づいてたらしいんだよ！

だから近いうちに火鴉が卵を取り戻しに来るかもって思って、

僕たちに捜査というか、ぶっちゃけ諸星さんの警護をするように仕向けたんだ！

知ってたんならその場で諸星さんに言うとか、僕たちに言うとかしてくれればよかったのに！

それに、なんであれが火鴉の卵だって知ってたわけ！？ 人外である淑生さんだって知らなかったのにつ。ほんと謎だよあの人！！ 憤懣やるかたなく、僕はソファーで、春希ちゃんが淹れてくれた紅茶を飲んでいた。春希ちゃんは僕の向かい側で茶菓子を食べている。

心なしか頬が赤いようで、時々僕をちらつと見るんだけど、目が合うとすぐに俯いてしまう。いつもそうなんだよね。なんでだろう？ ため息をついて窓の外を見ると、こっん、と僕の後頭部に何か当たった。

「？」

「あ、ごめん、ゆかりん」

振りむくと僕の足元に紙飛行機が落ちていた。淑生さんがもう一つ、紙飛行機を手に駆け寄ってきた。

「…紙飛行機？」

「ちよつと目測誤っちゃつて。大丈夫？」

「はい、ちよつと当たっただけなんで。どうしたんですか、これ」

「んー、暇だったから暇つぶしに作ったのよ」

それにしたってなぜ紙飛行機。懐かしいけれど。子供の頃よく作ったなあ。

「ゆかりんも作る？ 今、真愛良たちと誰が遠くまで飛ぶかやって

…」

言葉を切つて、淑生さんは瞬時に真剣な顔で僕の頭を抱え込み、姿勢を低くした。

「ぶっ！？」

「こーら、真愛良！ こっちに飛ばさないですよ。能力使うのも反則
ちから
」！

「使えるものは使った方がいいでしょ。一番はまいらだもーん」
「そんなのズルいわよっ」

何かもめてるみたいだけど、それは僕抜きでやって！ 今の僕の状況は、かなり苦しい。

頭を抱きかかえられたかと思ったら、そのまま淑生さんの胸に顔を押しつけられた。このままじゃ窒息する！

「むーむーっ！」

「あら、ごつめーん、ゆかりん」

「ぶはっ…はあ…苦しかった…」

「んふふ、でも気持ちよかったでしょう？ あたしの胸のな・か・は」

「そ、そりゃあ淑生さんの胸は大きくて柔らかかったけど……っつてそうじゃない！」

「いきなり何するんですかあ！」

「で、ゆかりんもやらない？」

人の話は聞いてクダサイ。もう、いくら暇だからって紙飛行機なんて……

「ふっ、油断すんのはまだ早いぜ？ トップはこの俺だ！」

火群さんがそう叫んで紙飛行機を飛ばす。紙飛行機は紙飛行機とは思えないスピードでこっちに飛んでくる。

「うわっ」

とつさに体を逸らしてよける。紙飛行機は開いていた窓から外に出していく。

きよ、凶器だ。火群さんの手にかかる、紙飛行機でも凶器に大変身だ。

「あ、危な〜……」

「あたしも負けてられないわね。よし」

淑生さんは紙飛行機を持って、真愛良ちゃんたちの方へ。

よくよく見れば、すでにあちこちに紙飛行機が落ちている。ずいぶん作っただな。こんな大量の紙、どこにあったんだろう。

捜査資料も書類も、今じゃデジタル化が進んでほとんどコンピューターの中だ。チラシでもなさそうだし、どこから持ってきたのやら……

はたと思い当たって、僕は嫌な予感がした。

そおいえば昨夜、昔の未解決事件を調べるために、一通り書類を借りてきたような……

確かにほとんどの資料や書類はコンピューターの中だけど、デジタルの場合、不測の事態でデータが壊れる場合がある。だから念のために紙での書類も保管されている。

その紙の方の書類を僕は昨日借りてきたんだ。そしてそれは、僕の机の上に置いておいたはずなんだけど……

その時、捜査の応援に駆り出されていた土師さんと天刻さんが戻ってきた。

「おわつ。何やってんだ、お前ら……」

「あーら、昂さん、天さん、おかえりなさい」

「おやおや、紙飛行機ですか。懐かしいですねえ」

紙飛行機の脅威から避難し、僕はおそろるおそろる床に落ちている紙飛行機を一つ手に取り、開いてみる。そして、愕然とした。

「ガキかお前は」

「まだ未成年だもーん。土師おじさんたちもやるつよ」

「お、勝負すつか？ 誰が来ても負けねえぞ」

「いいですねえ、幼少時代を思い出して、私も混ぜさせてもらいましようか」

「天刻さんまで……」

「ねえ、春希ー、あなたもやらなーい？」

【いいえ…私はいいです…】

「さあ、一番手はどいつだ！？ 来ねえなら俺から行くぜえ！」

「まいらもいつくよお〜」

背中でのみんなの声を聞きながら、僕はブルブルと手を震わせた。それはまぎれもなく、僕が昨夜持ってきた書類（の中の一枚）だっ

ただ!

「こ、これは……」

ななななんてことおっ。この書類はただの未解決事件じゃなくて、重要未解決事件のものなのに!

よりにもよって、よりにもよってそんなものを紙飛行機にするなんてえ!

「みんな、今すぐ紙飛行機を戻し……わっ!」

いくつかの紙飛行機が目の前に飛んできた。慌ててよける。

「紫ちゃん、そこにいたら危ないよ」

「おら、どけ、ゆか!」

「待って下さい、この書類は……」

「気をつけて下さいね、海宝君」

「はい、じゃあ次、あつたしー」

またも飛んできた紙飛行機をしゃがんでよける。

「だっ、だからやめてって……」

「ったくしょうがねーな。ガキの遊びに付き合ってやる、よっ」

なんと土師さんまで紙飛行機を飛ばし始めた! こ、これ以上、

重要書類をメチャクチャにしないでっ。

僕は床に落ちている紙飛行機を集めつつ、部屋の隅へと移動する。

「もう、みんな人の話を聞いてくれないんだから!」

たとえばデジタル書類で同じものがあると云っても、種類自体が大
事なものだ。他の人だって使うし……もしも。

「こんなことが総隊長や総帥に知れたら……っ」

「私に知れたらなんなのかな?」

……………。

「総隊長!?!?」

ぐりん、と振り向くと、隅っこで紙飛行機を拾い集めていた僕の
真後ろで、しゃがみこんだ総隊長が僕の顔を覗き込んでいた。いつ
たいつの間!!

軽い笑顔で「やっ」と小さく手を上げる総隊長。なぜここに!

いやなぜこんな時に！

「ここはいつも楽しそうだね。つつい遊びに来てしまったよ」

来ないでクダサイ！ 何もこんな時に！ ワークデスクの向こうでは、総隊長たちの存在に気づいているのかいないのか、紙飛行機競争がなおも続いている。

「紙飛行機か。いいね、私も昔作って遊んだものだよ」

「そ、そーですか」

無意識に声が裏返る。総隊長のくせに、どうしていつもこの人はここに來るんだよ！

総隊長って言ったなら、この警吏庁のナンバー2で多忙のはずなのに〜！

「それにしてもたくさん作ったんだね。それは紫くんが作ったのかな？」

「いえ、あの、これは……」

「私にも一つ貸してくれないかい？」

そう言つて、ひょいっと僕の腕の中から紙飛行機を取る総隊長。待つて、それは！

「ん？ この紙飛行機……」

ぎゃーっ！ 気づかれた！！

総隊長はおもむろに紙飛行機を

広げ、書面に目を走らせた。

「これって、私が昨日、君に貸した書類だよな？」

「そそそ総隊長、これには深いわけがっ」

「あはは、やってしまったね〜。重要書類で紙飛行機か。おもしろいねー」

ぺらぺらっと紙飛行機の折り目がついた書類をひらめかせながら、総隊長は満面の笑みを浮かべる。笑ってるけど……なんかオーラが怖い。

「まあ、別にコピーがあるからね。気にしないでいいよ」

僕の体からだらだらと冷や汗が流れ出る。総隊長はこう言つてくれているけど、重要書類であることには変わらない。

それに、総隊長からものすごくプレッシャーを感じる。や、やっぱり怒ってます？

「紫くん？ 大丈夫？ 私の話、聞こえてるかい？」

僕の顔の前で、総隊長は手を振ってみる。やっぱりこのままじゃいけない！

僕は大量の紙飛行機を抱えたまま、勢いよく立ちあがった。

「みんな！ 早く紙飛行機、いや書類拾ってキレイに戻して！」

「どーしたの、紫ちゃん」

「なんだなんだあ？」

「なるべくキレイに！ 元通りとはいかなくても、あまり目立たない程度に戻して下さい！」

叫びながら、僕は片っ端から紙飛行機を集め始める。みんなは一齐に不平を漏らした。

「えーっ、なんでえ？」

「後でちゃんと片付けるって」

「交せて欲しいならそう言えばいいのに。ゆかりんってば淋しがり屋さん」

「そうじゃありません！ これっ、この紙飛行機全部！ 重要書類なんですよお！」

「「えーっ！」」

「おやおや」

さすがにみんなも目を白黒させる。天刻さんは悠々としているけど。

「早く！ 早く元に戻して下さい！」

「なんでもっと早く言わなかった！」

「気づかなかつたんだから仕方ないじゃないですか！ それより、紙飛行機にする前に誰か気づいて下さいよ！」

叫ぶと、真愛良ちゃんがつまらなそうに、ぷいっとなつぽを向いた。

「まいら、知らなかつたんだもん」

「中身ちゃんと読んでクダサイ！」

「そういえばさつき、いくつか外に出てったよな……」

ぼつりと言った土師さんの言葉に、淑生さんが悲鳴を上げる。

「うっそ！　じゃあ、外まで探しに行かなきゃいけないの!？」

「どいつだ、外に投げやがったの！」

「あんたでしょ、ほむらん！　何考えてるのよ、バカ！」

「るせーな、知るか！」

「今はケンカしてる場合じゃありませんってば！　とにかく、全部残らず拾って下さ　い!!！」

隊員室に、泣き叫ぶ僕の声が響いた。そんな中、天刻さんと総隊長は立って壁に寄り掛かり、

「おやおや、いらっしやっただんですか、榊原さん」

「うん、さつきからね。何度来てもここは賑やかだね」

「そうですねえ」

なんて、手伝う気ゼロでなごやか々な会話をしている。

僕は今日も、明るくて、楽しくて、ちよっと……いや、かなり騒がしい一日を送っています。

式（後書き）

追伸列記簿

皆さん、こんにちは。特ゆか第二話をお届けしました。

しかし、この特ゆか、本来読み切り作品であり、この式は後半部分でした。トアル理由から二つに分け、連載物にしたんです。

火鴉は結構気に入ってまして、文字通り火の鳥をイメージしてます。綺麗だろーなあ、青や緑やいろんな色の火の粉（羽根）が散るのって。

諸星さんは被害者ですが、ある意味加害者でもあります。でも、悪気があったわけじゃありません。あの人は普通に新種の花だと思っただけだったので。

しかし火鴉にしてみれば卵泥棒。大切な我が子を誘拐されたわけですから、その怒りはごもつとも。無事生まれただけよかったです。います。

もし諸星さんが調べる、と言って花を開いたり折ったりなんかしてたらヒナ死んでますからね。

さて、一応特ゆかはまだ続きます。次回からはちよつと趣向を変えますので。それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

しんしんと雪が降っている。こんな日は家の中にこもって、こたつでミカンを食べたり、ごろ寝していたい。

していたいけど…僕にそんな暇はない。だって、僕はこれから仕事だから。

つい一週間前まで春の訪れを感じていたっていうのに、今週になって冬の寒さが戻ってきた。おかげで、ようやくしまった冬物を引っ張りだす羽目になったよ！

はあく、今日は一段と寒いなあ。ほんと、この時期は気候が不安定だよな。でも、今日は平日だから仕事に行かなきゃ。

えっと、初めましての人もあるかもしれないから、一応自己紹介しておくね。僕は海宝紫^{かいほうゆかり}。藍泉国^{あいずみこく}警吏隊士なんだ。

警吏隊って言うのは、町の平和と安全と秩序を守り、犯罪の予防や事件の捜査・解決、犯人の逮捕などを職務としている、『警吏庁』と言う機関に属する団体のことで、警吏隊に所属している人たちを警吏隊士って呼ぶんだよ。

町の平和を守る、なんて大げさな言いかたしてるけど、別に悪と闘ったりするわけじゃないから。いろんな事件の捜査や解決が主な仕事だよ。

警吏庁はいくつもの部と課に分かれててね、僕が所属してるのは、実際に現場に行くことの多い刑事部。課は特殊課。

特殊課はその名の通り、少し特殊だね。異能者や人外が関わっている事件専門の課なんだ。

異能者は、『異能』って言う不思議な力を持つ人たちのこと。人外は人間以外の種族の総称。

特殊課が特殊だと呼ばれるのは、異能者や人外の事件専門ってこともあるけど、そこに所属するヒトも異能者もしくは人外だから。特殊課は異能者と人外だけで編制されている課なんだ。

だったら僕もそうなのかって言うと、実は違う。僕は異能を持たない普通の人間　常人だよ。

どうして常人の僕が特殊課にいるかということ…ある特技が警吏庁のお偉いさんに認められたから。

それはね、いわゆる変装。限界はあるけど、顔や体格はもちろん、声も性格もトレースできる。この特技のおかげで、僕は特殊課にいるわけ。

白い綿雪が降る中、僕は警吏庁総本部に入っていった。特殊課はこの本部棟から離れた独立した建物にある。

出入り口には警備員のヒューマノイドが立っていて、彼にIDカードを見せて本人であることを証明しないと中には入れない。

IDカードを見せると、彼は無表情で通っていいと示す。見た目は普通の人間なのに、あれでも機械なんだよね。

何年前かに、世界初の自律型ヒューマノイドを造ったっていう人を新聞で見たけど、僕の親よりも若かったなあ。

確かまだ三十代だったと思う。ああいうの造れる人ってすごいなあと思うよ。

僕は二階の隊士室を目指す。特殊課はいくつかの班に分かれていて、僕は第三班なんだ。

第三班のプレートが付けられた、二階端の部屋。僕はボタンを押して自動ドアを開けた。途端にむわっと熱気が噴き出てきた。

「熱っ」

なんで部屋から熱気！？　まさか火事！？

慌てて中に入ると、床にあぐらをかいた男の人を、年齢が様々な数人の男女が囲んでいる。その中の一人が僕に気づいて手を振る。

「あ、紫ちゃん、おっはよー」

ピンクのロリータ系の服を着た女の子。彼女は木下真愛良ちゃんきのしたまあいり。異能者で、物や人を浮かせたり動かしたりできる“念動”能力者。

「よお、来たか」

円の中心であぐらをかいている、チンピラ風な男の人は火群景朗ほむらかげろう

さん。同じく異能者で、体から火を出すことのできる“発火”能力者。

「火群さん、何やってんですかー!?」

僕は叫んだ。火群さんから熱が襲ってくる。熱源は火群さんだ！
“発火”能力で体から熱を出してるんだ！

すると火群さんは口の端を持ち上げ、何か企んでるようにしか見えないうるな笑みを浮かべた。

「急に寒くなっただろ？ だから俺の能力で部屋をあつためてやってんだよ」

「それにしたって暑すぎです！ 何 あるんですかこの部屋！ …ぎゃーっ、27 ！？」

部屋の温度計を見て仰天する。いくら寒いからってこれは暑すぎ！

「なんで止めないんですか、天刻さん！」

「だって、寒いじゃないですか。こういう時、火群君の能力は便利ですねえ」

着物を着流し、襟に片腕を入れて常に目を閉じている男の人。

彼は天刻てんこく柎周まきちゅうかさん。目を合わせた相手に幻覚を見せる“魔眼”を持つているんだ。

目を閉じてるのは周りの人に不用意に幻覚を見せないように、らしいんだけど、あの人の場合、元々糸目なんだよねえ。

だから目開いてるんだか閉じてるんだか実のところよく分からない。

でもたぶん、ずっと目を閉じてるなんてできないし、あれでも開いてるんだと思う。……きつと。

「暖房あるでしょう！ 冷暖房完備なんですからここー！」

「わざわざ電力を消費しなくとも、天然ストーブたる火群君がいるんですし、電力の無駄じゃないですか」

うっ。それはそうだけでも！

「それでもこの部屋は暑すぎですよ。換気します！ 窓開けます

からね！」

「ずかずかと僕は窓に歩み寄る。すると後ろから全員のブーイングが。」

「おいおい、ゆか。せつかくあつたためたつてのに余計なことすんなよ！」

「そうだよ、紫ちゃん！」

「これくらい大丈夫ですよ。暖かくていいじゃないですか。ねえ、水宮君？」

天刻さんがソファアームでまるまっている女の人に声をかける。女の人はずくつと起き上がり、僕に飛びついてきた。

「わあっ」

「ひどいわあ、ゆかりんったら。あたしが寒さに弱いつて知ってるでしょお？」

だるそうな声を出してしがみついているのは水宮淑生みのみやすなおさん。人外で、水の神でもある蛇神。人の姿をしているけど、その正体は大きな白蛇なんだ、けど……

「わわわ、す、淑生さん！」

背中に胸当たってます！ 赤面して淑生さんを引きはがそうとするけど、さすがは人外。見た目は女の人でも力が強い。

それに蛇だし……巻きつくようにしがみついて離れてくれない。

「つれないこと言わないで、ね？」

「な、なんと言おうと換気します！ 窓開け……あれ？」

窓を開けようと手をかけたけど、動かない！？ カギは開いてるなのに開かない。なんで？ いくら力を入れてもびくともしないなんて。

「あ、開かないいっつ。壊れたのかな？」

「ダメダメ、紫ちゃん。開けたら寒いでしょ？」

真愛良ちゃんがホットココアをすすって言う。それでピンときた。

「真愛良ちゃん、能力ちから使ってるね？」

「なんのこと？ まいら知らなーい」

「とぼけてもダメだよつ。もう、こんな暑い部屋にいたら気分悪くなっちゃうじゃないか！」

力づくで開けようとするけどダメだ。奮闘していると、くっついてた淑生さんが離れた。

かと思つと、足元から地面が消えた。

「え？」

違う。地面が消えたんじゃない、僕の体が宙に浮いてる！？

「寒い時はあったかい部屋にココアって決まってるの！」

「ちょ、ちよつと真愛良ちゃ……」

「紫ちゃん、あつち行って！」

ぐんつ、と何かに引つ張られるように、僕の体は真愛良ちゃんの“念動”によつてデスクの方へ飛ばされる。

「わーっ！ー！」

飛ばされた僕は受け身も取れず、背中から床に落ちる。さほど強い衝撃じゃなかったけど、叩かれた時のようなヒリヒリ感がある。

「あたた……真愛良ちゃんってば、見かけによらず乱暴なんだから……」

……

背中を起こすと、ぱさつと顔に布のようなものが被さつた。なんだろこれ。

布をつまんでさらに身を起こすと、布が後ろに引つ張られる。振り返つてみて僕は硬直した。

僕の視界に入ったのは人の両足と、その間の暗がりに見えるイチゴ柄の……

「あ………」

顔を上げて僕は絶句する。赤い顔でスカートを押さえながら僕を見下ろしている女の子。

彼女は金成屋春希ちゃん。声で相手を操ることのできる“声魅”能力者。

春希ちゃんは目を潤ませて、膝の上に置いていたスケッチブックで僕の顔を突き飛ばした。

「うぶっ！」

勢いで僕は入り口まで転がった。あわてて春希ちゃんが駆け寄ってくる。

【すみません、海宝センパイ…！】

春希ちゃんはスケッチブックを見せて頭を下げた。春希ちゃんは能力のコントロールが未熟で、なるべく声を使わないようにスケッチブックで筆談してるんだ。

「あはは…大丈夫。僕の方こそごめん」

春希ちゃん、イチゴパンツなんだな…って違う！ さっきのは不可抗力だし！

とにかく火群さんたちを止めないと。あ、そうだ。

「春希ちゃん、“声魅”でなんとかしてよ」

上半身を起こして言うと、春希ちゃんは目をしばたいた。

「これ以上僕が言ってもダメだし、あとどうにかできるのは春希ちゃんだけなんだ」

【で、でも…】

「お願い、春希ちゃん」

じっと見つめると、春希ちゃんはかあつと頬を朱くして小さく頷いた。

スケッチブックを閉じて、深呼吸してから火群さんたちを振り向く。

『真愛良さん、“念動”を止めて下さい』

春希ちゃんが“声魅”を使うと、真愛良ちゃんはぴくん、と動きを止めた。

『火群センパイもやめて下さい』

金縛りにあったように、火群さんも身動きが取れなくなり、熱の放出をやめる。

天刻さんが「おやおや」と苦笑いして、仕方ないというふうに窓を開けてくれた。

淑生さんが入り込んできた冷たい風にぶるっと震えて、ソファ―

の毛布を体に巻きつける。

「あの…これでいいですか？」

春希ちゃん是不安げに振り返って僕を見下ろした。あの二人があつさり言うこときくなんて、“声魅”はすごいなあ。僕は立ち上がって笑った。

「うん、ありがとう。春希ちゃんがいてくれて助かったよ」

「そ、そんな…私なんて未熟な半人前の警吏です……」

「半人前なのは僕も同じだよ。ふふ、春希ちゃんの声、久し振りに聞いたよ。綺麗な声なのに筆談なんてもつたいないなあ」

そう言つと、春希ちゃんは顔を真っ赤にしてスケッチブックで顔を隠した。あれ？ 僕、何か悪いこと言ったかな？

そこで入り口が開いて冷気が入ってくる。背後で驚いた男の人の声がする。

「うお、海宝と金成屋、何してんだ？ こんなところで」

立っているのは小さな丸眼鏡をかけた男の人で、土師昂行さん。はしたかゆき

自分の体や服を透明化させたり、壁なんかをすり抜けることができる“透化”とつか能力者なんだよ。

僕たちは土師さんに道を譲った。

「いえ、ちよつとしたトラブルで……」

「？ そうか。それにしても、なんでこの部屋こんなに暑いんだ？」

「さっきまで火群さんが熱放出してたんですよ。今、春希ちゃんが“声魅”で止めてくれましたけど」

「だからか……おい、火群。やりすぎだぞ」

呆れ気味に土師さんが火群さんたちに近づいていく。火群さんは「あん？」と土師さんを仰ぎ見る。

と、その頭を土師さんがぺしつと叩いた！？

「…何すんだよ！」

ぎゃーっ、やっぱり怒ったあああつ！ 土師さん、なんてことをおおおっ！

火群さんが立ち上がって、土師さんを見下ろす。と言つても、火

群さんの方が数センチ高いくらいなだけ。

「いやいやそれより土師さん逃げてー！ 殴られちゃうよ！」

僕と春希ちゃんがおりおろする。けれど、土師さんは逃げるどころか火群さんの胸を拳で軽く叩いて、ため息混じりに言った。

「雪が降って落ち着かないのは分かるけどな。慢心するなって言っただら？」

「……………」

眉間にしわを寄せたまま、火群さんはしばらく無言だったけど、ややあつてばつが悪そうに、ソファアの空いているところに座った。僕と春希ちゃんはぼかんとした。あ、あの火群さんがおとなしい！？ 僕や他の人が注意したり文句を言うときすぐ怒鳴るのに！

「すごい…土師さん…」

「あの二人は昔から仲いいからねえ」

突然、誰もいないはずの背後から人の声が！ 僕は振り返って悲鳴を上げた。

「ぎゃーっ！！ 榊原総隊長！？」

紅い隊士服を着てにこにこ笑っている男の人。この人は榊原陽向むか総隊長。この警吏庁総本部の長官なんだ。

神出鬼没で、いつも飄々としている雲みたいな人。

異能者が常人か、はたまた人外かいまだに知らないけど、僕としては人外に一票。

だつてこの人、ほんつとに神出鬼没なんだよ。今みたいに…

「なんでここにいますか！？ また遊びに来たとか言うんじゃないやありませんよね！？」

「よく分かつてるね。その通りだよ」

にっこり笑って肯定。忙しいはずなのに、なんでこの人はちよくちよく特殊課に顔出すかな。

まあ、特殊課は総隊長直属の課だけでもさ。だからこそ余計に怪しい。この人は異能者もしくは人外だ。

「暇じゃないんでしょうに、よくこうも毎日…って、さっき、土師

さんと火群さんは昔から仲いいって言ってましたけど、どういう意味ですか？」

「ん？ そのままの意味だよ？ 景朗くんが入隊した時にね、昂行くんが面倒見ていたんだよ。それで景朗くんは昂行くんに懐いちゃってね。」

まるで年の離れた兄弟みたいで可愛かったよ。まあ、今でも充分可愛いけれどね。ふふふ」

火群さんをかawaiiって…総隊長恐るべし。

そう言えば、入隊して二年になるけど、みんながいつ入隊したのかとか知らないなあ。いい機会だから訊いてみようかな。

「その話、詳しく聞かせてくれませ…ってあれえ!？」

総隊長がいない!？ いつの間に消えたんだあの人。というか、何しに来たんだよ…

呆然としていると、天刻さんが寄ってきた。

「今しがた、榊原さんが来てましたねえ。すぐに帰られましたけど。なんの話をしてたんです？」

「えっと、土師さんと火群さんが、昔から兄弟のように仲がいいって総隊長が言ってたんですよ」

「ああ、言われてみればそうですねえ。火群君は、入隊したばかりの頃はすごい荒れてましたけど、土師君と滋生君（せいぞう）が世話をしてからちよつとはマシになりましたから」

「滋生…さん？」

誰だろう。聞いたことないなあ。三班の前のメンバーかな？

「滋生 織（はとり） 昔、三班にいた方です」

「その人は今どうしてるんですか？」

すると、天刻さんは哀しげに笑った。それだけで、僕にはその先の天刻さんの言葉が分かった。

「…亡くなりましたよ。任務中のある事故でね」

訊いてはいけないことだったかもしれない。俯いた僕を、天刻さんは微笑して見つめた。

「少し、昔語りをしましょうか。火群君はこの話をする和不機嫌になりますから、隣の部屋でもね」

今から九年前。

この時、火群景朗・十七歳。土師昂行・二十四歳。天刻柁周・三十二歳。

そして滋生 織・十九歳

「くおーら、景朗！ またこんなところでサボって！」

藍鼠色のセミロングの髪、顔は目となる部分に、二つの細長い黒の楕円しか描かれていない面で覆われ、表情は見えない。そして尖った蘇芳色の犬耳と尻尾、同色の背中から生えた翼。

どこから見ても人間ではないその女は、眼下の芝生の上で寝そべっている少年を見下ろして、面の下で眉を吊り上げた。

「テイラー班長が呼びだよ！」

「…るせエな」

染めた金髪、耳に開けたいくつものピアス。はだけたシャツから覗く胸元には切り傷がある。

火群景朗。先々週、特殊課第三班に入隊した新人警吏隊士だ。

「クソババアに言つとけ。俺ア行かねエってな」

交差した腕を枕にし、目を閉じたまま火群はけだるげに言った。

滋生は火群の横に降り立ち、腰に手を当てて真上から顔を覗き込む。「クソババアじゃないだろ。テイラー班長と呼びなつて何度言わせるんだい！」

「チツ。っせエな。いいからとつとへ行けよ」

「あんたを連れていくために来たのに、一人でなんて戻れないよ」

「うざつてエな。俺ア眠いんだ。寝かせるよ」

「寝たいんなら任務終えてからにしなよ。ほら、起きな！」

揺さぶつても火群は起きようとしな。滋生はため息をついて、不意に何か思いつく。

にまっつと笑って、自身の翼から羽根を一本抜き、火群の鼻先に置く。羽毛が火群の鼻をくすぐり、大きくくしゃみをする。

「……へ…ぶへっくしょわい！」

「ぶっ。あっははははは！ 『ぶへっくしょわい』だって！ 変なくしゃみー！」

おなかを抱えて滋生が笑うと、火群は鼻をこすりながら起き上がった。

「このアマ…何しやがる！」

火群が立ち上がると、滋生はふわつと空へと逃げる。

「あはは！ 捕まえられるものなら捕まえてみな！」

「おい！ 空飛ぶなんてずりイぞ！」

「あたいを捕まえるなんて百年早いよ、悪ガキ！」

「降りて来い！ 卑怯だぞテムエ！」

腕を振り回して怒鳴っていると、丸眼鏡をかけた男が茂みを掻きわけて顔を出した。

「滋生、火群、ここにいたのか」

火群は内心で、見つかつちまったと舌打ちする。土師は火群を見て小さくため息をついた。

「火群、班長がかんかんだぞ」

「それがどうしたってんだ。俺ア行かねエぞ」

「さつきからこの調子なんだよ」

肩をすくめて見せる滋生。土師はやれやれと頭を掻いた。

「仕方ない。強行手段だ。滋生、風で運んでいけ。こうなるだろうと思って窓は開けてきた」

「分かったよ」

滋生は手の内に扇を出現させ、一振りする。

「ああ！？ ふざけ…！」

抗議しかけた火群を滋生の扇から起こった小さな竜巻が包む。

「何しやがる！ 下ろせ！」

「じゃあ昂行、先行つてるよ！」

「おお」

「下ろせ！ 下ろしやがれ天狗女！」

翼をはためかせ、滋生は特殊課に向かって空を駆けた。その横を竜巻が並走していく。

滋生は人外で天狗族なのだ。彼女の持つ檜扇てんこうは風を起こすことができる天狗扇。天狗の象徴でもある。

当時の火群は、火群の住む区内で有名な不良少年だった。高校は退学、実家からは勘当されていた。

不良仲間たちと日夜遊びまわり、中学生や高校生をカツアゲしたり、オヤジ狩り、ホームレス狩りなどをして懐を潤していた。

チンピラや他の不良とケンカをすることもあり、荒れた毎日を送っていた。“発火”能力はこの頃に発現。

絡んできたチンピラとケンカをしている最中、チンピラが仲間の腕の骨を折った。

その時の怒りが“発火”能力を目覚めさせたのだ。チンピラを火ダルマにし、火群たちは逃げた。

それから火群は自分の能力を誇示した。反抗する相手や敵には容赦なく炎をお見舞いし、いつしか“炎上の火群”と通り名を付けられ、その区内で火群に手を出す者はいなくなった。

そんなある日、火群の名を知らない不良グループが火群にケンカを吹っ掛けた。売られたケンカは買う主義の火群は、当然相手をした。

そして恐れをなして逃げようとする不良たちを炎の輪で囲んで追いつめた時、現場に総隊長がやってきた。

『やあ。“炎上の火群”というのは君だろうか？』

『…あんだよテメエ。俺ア今お楽しみ中だ。邪魔すんじゃないね』

遠くで不良たちが炎に囲まれ、熱さで悲鳴を上げていた。熱風が吹きつける中で、陽向は平然とした顔で笑っていた。

『悪いね。でも、君と話がしたいんだ。少し炎を止めてくれないかな。彼らを帰して、二人きりでゆっくり話をしよう』

『気色悪いこと言ってるじゃねエよ。俺ア話なんざするはつもりね
エ』

『君にはなくても私にはあるんだ。だから炎を止めてくれないかい
?』

『るせエ! 邪魔すんなつつつてんだろ! これ以上ガタガタぬ
かすんならテメエも火ダルマにすんぞ!』

火群は陽向に向かって火炎球を投げつけた。火炎球は陽向の全身
を包みこみ、火ダルマにする。 だが。

『ふむ。血気盛んだね。若い若い。でも、私に炎は効かないよ』

陽向が炎を撫でるように手を振ると、陽向を包んでいた炎はすう
と消えた。火群はぎよつとして啞然とする。

『俺の炎が……テメエも炎使いか!?!』

『うん、まあそんなところかな? だから私に炎を向けても意味を
なさないよ。おとなしく言うことを聞いてくれないかい?』

笑顔で陽向は火群に歩み寄る。火群はじりじりと後退した。

得体のしれない男に対する恐怖と、初めて炎が効かなかった敗北
感から、火群は不良たちを囲む炎の輪を消した。途端に不良たちは
逃げ出す。

『…話つて、なんだよ』

『聞いてくれる気になったかい?』

『るせエ。とつとと話せよ!』

『短気だねえ。まあいい。若い子はそれくらい元気があつた方がい
いからね。』

単刀直入に言おう。火群景朗君。警吏隊に入ってくれないか
い?』

『……ああん?』

思いつきり顔をしかめて火群は陽向を睨みつけた。警吏隊と言っ
たら、町の平和やら何やらを守る奴じゃねえか。

まっとうな生き方をしていないと自覚している自分とは縁遠い、
それどころか正反対の位置にあるものだ。

どちらかと言えば捕まえる方ではなく捕まえられる方だし、実際に何度か世話になったこともある。

(何考えてんだこのオヤジ)

『君は異能者だ。能力名は“発火”。炎や熱を自在に操れる。君にはまだ未熟な部分はあるが、能力値は高い。』

今のままではその力を持って余すだけ。だから私のもとに来て、その能力を生かしてみなさい。

警吏庁には君のような異能者や人外だけで編制されている特殊課というものがあってね、君はそこに所属するんだ。

きつと君も気に入るよ。警吏庁には寮があるし、入隊したらそこで暮らすといい。一人部屋と二人部屋があるけど、火群君は一人部屋がいいかな?』

『待てよ、勝手に話進めてんじゃねエ。俺ア入るなんて一言も言っ
てねエぞ』

『入るべきだよ。今のままでは、君はダメになってしまう。
一生、その能力を無駄に使って、他人のお金を巻き上げて、惨めな暮らしを続けるのかい?』

世の中には、君の能力を必要とする人がいるというのに』

落ち着いた陽向の声に、火群は押し黙っていたが、小さく舌打ちをして、『そこまで言うなら入ってやるうじゃねエか』と入隊を承諾した。

だからと言って火群が改心することはなく、入隊しても勝手放題だった。

講習や朝会に平気で遅刻するわサボるわ、喫煙所以外でタバコを吸って灰や吸い殻を落とすわ、他の隊士に嫌がらせをしたり事実無根の悪い噂を流すわ……歴代の警吏隊士の中で一番の問題児だった。

そんな火群の世話を焼く羽目になったのが、土師と滋生だった。

二人は火群の所属する第三班の中で年齢が近かったため、自然とそうなってしまうた。

元不良の相手なんて、最初は気が向かず嫌々やっていた。

あまりのワガママに腹を立てることもあったが、家庭の不仲が原因ですれてしまった火群を、いつの間にか放っておけなくなった。

何かと構ってくる二人が、火群はうつとうしくて仕方がなかった。だから初めは寄って来る二人を火炎球で脅していた。

それでもめげずに面倒を見ようとする二人に、少しずつ火群は気を許していった。

口では「るせエ」「うざってエ」と文句を言うが、火炎球をぶつけることはしなくなった。

他の隊士には相変わらずの態度だが、二人にだけは、ほんのちょっぴり素直な態度を取るようになったのだ。

そんなトリオが庁内で有名になった今日この頃。火群はこの日が初めての任務だった。

まさかこの任務が深い傷跡を残すことになるうとは、この時の火群は知る由もなかった。

あつと言つ間に特殊課三班の部屋に辿り着き、滋生は火群を窓から投げ入れる。

「つてエ！ この乱暴天狗！ 女だからっていい気になってんじゃねエぞおらア！」

「ふん。乱暴なのはどつちなんだか。そんな言い方してると女にモテないよ」

「るせエ！ 余計なお世話だ！」

「火群隊士」

背後からハスキーボイスの女性の声がする。火群はぎくりとおそるおそる振り返る。

腕組みをし、眼鏡をかけた女性　テイラー班長が床に座り込んでいる火群を見下ろしていた。

「私は三十分ほど前に召集をかけたはずなんですけれどね。なぜ来

なかったのですか？」

火群は顔をしかめてテイラーから顔を逸らした。

「るせエな。どうだっついていいだろ」

「火群隊士？」

一層テイラーの声が低くなり、額に青筋が浮かぶ。それでも火群は反抗的な態度を崩さない。あぐらをかいて膝に頬杖をつく。

「しつげエんだよ、クソババア」

ピキキ…

テイラーの頬が引きつり、額からよきによきと二本の細い角が生えてくる。それを見た滋生が狼狽する。

「バ、バカ、景朗っ」

「ああん？」

「火群隊士…：…言いたいことはそれだけですか？」

眼鏡が光り、テイラーの表情ははつきりと見えないが、確実に怒っている。

女性の体から妖気が噴き出し、火群を金縛りが襲った。

妖気にあてられ、火群の体を脂汗が伝う。一歩一歩ゆっくりと近づくとテイラー。滋生は怖ろしさで動けなかった。

彼女を止めたのは、同じく隊士室内にいた天刻だった。テイラーを後ろから羽交い絞めにして笑う。

「まあまあ、テイラーさん。あなたが本気で手を上げたら火群君が死んじゃいますよ」

テイラーは眉根を寄せて、渋々といった感じで「本気なんか出しません」とやんわり天刻の手をほどく。突き出していた二本の角も元に戻っていた。

グレイシア・テイラー。彼女も人外で鬼族である。普段は角を隠しているが、感情が昂ると角が出るのだ。

「とにかく、火群隊士。これから任務に行ってもらいます。滋生隊士と土師隊士の三人で…土師隊士は？」

「はいはい、ここですよ」

ちょうど土師が隊士室に入ってくる。滋生も窓から中に入り、翼を消した。

「三隊士にはこれから伊師市の宇賀尾山に赴いてもらいます。報告によれば、ここ一カ月の間に、十四人もの登山者が氷漬けで発見されたそうです」

「氷漬けえ？」

火群が胡乱気に顔をしかめる。今はまだ九月だ。山とはいえ、まだ雪は降っていないはずだが。

テイラーが眼鏡を指で押し上げる。

「時期的に降雪はまだありませんが、気温そのものはだいぶ低くなってきています。ですから雪恠妖や氷恠妖も、少しずつ出てき始めているのでしよう。」

あなた方には登山者の安全確保と犯人の逮捕を命じます」

「了解」

「分かりました」

「チッ」

「火群隊士、返事は舌打ちでなく言葉を返しなさい」

「るせエよ、鬼ババア」

ピシ…と再び、テイラーの額から角が生え出る。土師と滋生は慌てて敬礼し、火群を半ば連れ去るように隊士室を飛び出して行った。

参（後書き）

追伸列記簿

こんにちは、皆様。甲斐日向です。特ゆか第三話をお届けしました。

今回からは過去編と言いますが、入隊エピソードをつらつらと綴っていかうと思います。なので、ほとんど壱・弐のような紫視点ではなくなります。

トップバッターは火群。でもなんだか暗くなりそうな話。さらにさらに、一話完結じゃない！

えー、更新は不定期ですので気長にお待ち下さい。それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

肆

伊師市は宝生ほうせいから見て北東にある市だ。山が多く、登山家とんさんかがよ
くやってくる。

土師の運転する車の中で、後部座席でめんどくさげに足を組んで
いた火群は不平を漏らした。

「ったくよ、なんで俺がこんなところまで来なくちゃなんねえんだ」
「任務だからだよ。あんたはさつきから口を開けば、めんどくさい
だのかつたるいだの文句ばかりだね」

助手席に座る滋生がシート越しに振り返って半眼になる。火群は
後頭部で腕を交差させ、背もたれに寄りかかった。

「クソ眠イ。着くまで俺ア寝るぜ」

「ワガママだねえ。：ははーん、あんたもしかして、初任務だから
って緊張してるんじゃないかい？」

滋生が意地の悪い笑みを浮かべると、火群はカツと目を開いて滋
生に詰め寄る。

「んなわけねえだろ！ 誰が緊張なんざするか！！」

「凶星かい。やっぱりまだまだガキだねえ」

「違エつつつてんだろ天狗女！」

「あのさあ、景朗。前から言おうと思つてたけどね、あたいを天狗
女てんこうめって呼ぶのはやめてくれないかい？ あたいにゃ『織』はとろって立派
な名前があるんだ」

びしつと人差し指を火群の鼻先に突きつける滋生。火群は一瞬た
じろいだが、フンと鼻で笑い、体勢を戻した。

「ケツ。変な名前しやがって」

「なんだって？ 『織』つてのはね、天上の機織姫のような才色兼
備の女になるようにってババさまがつけてくれたんだよ！」

「さいしょくけんびだあ？ ンだ、そりゃ」

「そんなことも知らないのかい？ 才色兼備っていうのはね、優れ

た才能と美貌を併せ持つているってことだよ」

「ハッ。テメエみたいながさつ女が、さいしょくけんびなんてなれるわきゃねエだろ」

小馬鹿にするように笑う火群。むかつとした滋生は背もたれから身を乗り出した。

「なんだい、初任務で緊張してふるふる震えてる奴に言われたくないね！」

「ンだと!? 誰が震えてるってんだ、ああ!？」

ぎゃおぎゃおと怒鳴り合う二人の横で運転している土師は、「静かにしてくれないか、二人とも……」とげんなりした。

かくして、火群たちは現場の宇賀尾山うがおせんに到着した。

三人は犯人と思われる恠妖あやしたちに警戒されないう、登山者に扮して山に入ることにした。

だが、大きなリュックを背負った火群は少し登ったところで早くも音を上げた。

「くっそ…なんで俺がこんなことしなくちゃなんねエンだ…だいた、山なんざ登って何が楽しいってんだよ……」

「何言つてんだい、気持ちいいじゃないか。こんなに清々しい気が溢れてるんだよ」

「清々しい気イ? …分かんねエぞ」

「やつぱり山はいいね。あー、こんなに気持ちいいと空を飛びたくなるよ」

言うや否や、滋生は背負っていたリュックを下ろし、翼を出して空へ飛び上がった。

「おいこら、天狗女! 荷物置いてくんじゃねエよ! チツ。あれのどこが登山者なんだよ。言い出しつぺのクセしやがって」

「はしゃいでるなあ、滋生。まあ、山は天狗族にとっては故郷だしな。無理ないか」

滋生の置いていった荷物を拾い上げ、土師は空を飛び回っている滋生を見上げる。

「天狗族と言えば…いつも滋生がつけている面あるだろ。あれは天狗族の掟で、心を許した相手の前でしか外しちゃいけないんだとさ」
火群は何気なく頭上を仰いだ。滋生は大きな翼を広げて悠々と飛んでいる。

隣を歩いている土師に「面の下、気になるか？」とズバリ問いかけられて、火群はカツとなる。

「はあ！？んなわけねエだろ！！あんな奴の素顔なんざ見たくねエよ！どうせすっげーブスに決まってるんだ！あんながさつ女！」

「そうでもないかもしれないぜ。天狗族は美男美女が多いつて聞いたこと…」

土師の言葉は最後まで続かなかった。土師は突き出ていた木の根につまずいて、ごろごろと転がった。

「んなつ。何やってんだよ土師のアニキ！大丈夫か!？」

「いたた…何かでこけたみたいだ」

「見りや分かるつつの。つたくボーツとしてるからだぜ」

その場でこけるのではなく転がっていったのは、荷物のせいでもあつただろう。

火群は何も言わず、ひよい、と滋生の分の荷物を担ぎあげた。土師は意外に思つて火群を見つめる。

「ンだよ、早くしろよ。こんなとこで座り込んでたつて、犯人が出てくるとは限らねエだろ」

そう言われて、それもそうだと土師は腰を上げた。依然、犯人が出てくる気配はない。

最初の休憩所に辿り着き、火群たちは荷物を下ろした。

火群が肩を回して凝りをほぐしていると、土師が水筒のキャップに麦茶を注いで差し出した。

「火群、茶」

「おっ」

受け取ってキャップに口をつけた時。

「そう言えば、さっきオレのこと、『アニキ』って呼んだよな」
ブーッ

火群は思い切り麦茶を噴き出した。ごしごしと口元を袖で拭いながら土師を振り返る。

「なっ、なっ、なんで今頃言うんだよ！」

「いやー、あまりに自然に言われたから特に気にならなかったんだけど…今、そう言えば言われたな」と

迂闊だった。無意識に口に出していたらしい。火群は照れくささから声を荒げた。

「バツカじゃねエの！？ どんだけ前の話してんだ！ 鈍くせエな！！ だからあんなとこでこけんだよ！」

「なんでアニキ？」

「ンだよ、呼んじゃ悪イかよ！」

ヤケクソで返すと、土師はたらたらと歩きながら寄ってきて、ぽふ、と火群の頭に手を置いた。

「いんや。なんか新鮮だな」と思って。オレ、一人っ子だからさ。嬉しいよ」

そのまま撫でられ、火群は頬を朱くした。頭を撫でられるなんて生まれて初めてだ。

「…ガツ…ガキ扱いしてんじゃねエよっ」

「ん」

しかし、土師は撫でる手を止めない。火群は恥ずかしい半面、少しだけうれしくもあってされるがままになっていた。

そこへばさりと羽音を立てて、滋生が舞い降りてきた。

「なんだい、二人して仲良くなんの話だい？」

「んー、火群がオレのことアニキってさ」

「言っな…！」

「昂行がアニキ？ へえーえ、じゃああたいはアネキだね。今度か

たかゆき

らはそう呼びな」

滋生が火群の頬を指でつつく。火群は一瞬目を瞠ったが、すぐに眉間にしわを寄せて、その手を払った。

「ケツ。誰が呼ぶかよ。テメエなんざ天狗女で充分だ」

「なんだって？ 名前で呼ばないからそれで譲歩してやろうつてのにさ。かわいくないね」

滋生が腕組みをして不機嫌そうに言った時だった。どこからか冷たい風が吹いてきて、その中に妖気感じた滋生は周囲に目を配らせた。

「気をつけな！ 近くに恠妖あやしがいるよ！」

「犯人か？」

「分からない…でも多いよ」

対して動じていなさそうな土師に天狗扇を出して応え、滋生は辺りを見回した。

複数ということは雪女や氷女の類ではない。彼女たちは群れることを好まないのだ。ならば。

と、その時、木の陰から氷塊が飛んできた。

「！そこかいつ」

天狗扇を一振りし、烈風で氷塊を弾き飛ばす。すると、木陰から真っ白な長毛に覆われた丸い生き物が複数飛び出してきた。

毛むくじゃらの生き物は三人をぐるりと囲んだ。

「アイズアツフェか…：…もしかしてあんたたちかい！？ 登山者を氷漬けにしたのは！？」

滋生が詰問する。アイズアツフェは人語を解する氷の恠妖だ。

白い長毛が全身を覆い、目はそれに隠れて見えないが、長い二本の牙が毛の間から下に伸びている。

滋生の問いにアイズアツフェの中の一匹がケケケ、と笑った。ひとときわ体が大きい。こいつがリーダー格なのだろう。

「そうだと言ったらどうする？ 人間ども」

「ハッ。犯罪者はみんな俺サマの炎でとっちめてやるぜ！ うりゃ

「あああつ」

言うが早いか、火群はアイスアツフェたちに向かって炎の渦をお見舞いする。アイスアツフェたちは器用にジャンプしてよける。

火の粉が飛んできて、土師は慌てて避けた。

「火群、慢心するな。慢心しているとそのうち痛い目見るぞ？」

「土師のアニキは後ろ下がってな！俺サマの炎にかかれば、こんな奴ら仕留めんのはちよろいもんだぜエ！」

炎の勢いが増す。アイスアツフェは翻弄するようにひよいひよいとよけ、妖力で氷塊を作って投げつけてくる。

だが、火群の炎ですぐに溶かされてしまう。

「あのバカ、調子に乗って。雪や氷を操るアイスアツフェと、炎を操る景朗なら景朗の方が有利だけど、あいつらの力はこんなもんじや……」

そう言った滋生が咳き込んだ。土師が焦って飛んでくる。

「滋生！」

「……大丈夫……時間はまだあるよ……」

体を支えようとする土師の手をやりわりと押し返し、滋生は大きく息をついた。気遣わしげに滋生を見つめる土師。

一方、火群は二人の様子に気づかず、飛び回るアイスアツフェに手当たり次第に火炎球をぶつけていた。

だが、身軽な彼らは器用にそれを避けるので全く当たらない。火群は苛立たしげに舌打ちする。

「クソ。ちよこまか動きやがって……！おい、テメエら！なんで人間を襲った！？」

「ふん……理由などない。ただ、オマエたち人間が慌てふためくさまがおもしろいからさ」

「愉快犯かよテメエら。ウゼエな」

眉をひそめると、リーダー格のアイスアツフェが高笑いした。突然なんだ、と火群はさらに眉間にしわを寄せる。

「何を言う。オマエも同類だったくせに」

「ンだと？」

「オマエも少し前までは、つまらない日常に飽き飽きして、快樂を求めて弱者をいたぶっていたではないか」

リーダー格の言葉に、火群は軽く目を瞠る。どうしてそんなことを知ってる？ 疑問の答えは背後の滋生が持っていた。

「油断するんじゃないよ！ アイズアツフェは“念読”を使うよ！」

「“念読”だア？ ンだ、そりゃ」

「“念読”はサトリっていう恠妖の能力でね、人間の心や記憶を読む力だよ。アイズアツフェはそのサトリの眷属なんだ」

滋生の言った通りなら、相手はこっちの行動を予測することもできる。どうりで火炎球が当たらないはずだ。

「そういうことは先に言っとけよ！」

「なんだい、勝手に突っ走ったくせに」

「ケケケ。退屈な日々の鬱憤うつげんを晴らすために、快樂を見出すために罪を犯していたお前が、今や逆の立場とはな」

「るせエよ！」

火炎球を叩きつけるが、“念読”を持つアイズアツフェはいとも簡単によける。

「オマエが警吏になったのは、恐れたからか」

「！」

アイズアツフェは“念読”で火群の記憶を読み、嘲笑交じりに語った。

「本能が訴える恐怖から…オマエはあの男に屈したのだな。ケケケ、精神の脆い奴よ」

「…るせエ」

「脆い。そして弱いな。だからこそ自分より弱い者をいたぶらねば満足できなかった」

「るせエ」

「オマエも快感を得ていたのだろう？ 弱者をいたぶることが愉しみだった。愉しくて、許しを乞う者を見下している時、唯一の幸せ

を感じた」

「るせエ！」

事実を言い当てられ、火群の頭に血が上る。炎を鞭のようにしてアイズアツフエたちを薙ぐ。

しかし、当然のようにアイズアツフエたちに攻撃は当たらない。

興奮している火群を滋生が叱責する。

「落ち着きな！ 簡単に挑発に乗るんじゃないよ！」

「るせエ、何もしてねエ奴は黙ってる！」

「景朗！」

滋生が火群に駆け寄り、腕をつかんだ。火群は一瞬びくりとして、「触んな！」と腕を振り払った。

その瞬間の心の変化に、アイズアツフエは体毛の奥でにやりと笑った。

「ケケケ…心は正直だな。オマエは今、動揺している」

「…るせエ」

「その女に触れられたからか。オマエはその女に…」

「るせエツつてんだよオオオオツツ！」

完全に血の上った火群は、全身から炎を出した。火群を中心に火柱が立つ。

怒り任せに放たれた炎の渦が、“念読”で予測しきれなかったアイズアツフエたちを巻き込む。

火ダルマになったアイズアツフエたちが絶叫し絶命していく。

炎の渦は土師や滋生にも及んだ。土師の左腕を火が伝う。

「がっ、あああっ！」

「昂行っ」

地面を転げ回り、なんとか火を消す。じりじりとした火傷の痛み
に、土師は脂汗を浮かべて苦悶に顔を歪めた。

滋生は向かってくる炎から逃れ、土師のもとへ飛んだ。

「早く手当てを…」

そこで、はっと周囲に視線を滑らせた。飛び火した木々が燃え出

している。

「これじゃあ山火事になっちまうよ……景朗、炎を止めな！」

叫ぶが、アイズアツフェの断末魔にかき消されて滋生の声は火群に届かない。

リーダー格のアイズアツフェも炎を喰らった。死に行く仲間たちと燃える木々を見て自嘲する。

「あの程度で心乱すとは、少しからかいすぎたか……だが、これ以上山を傷つけさせはせん！」

最後の妖力を振り絞り、リーダー格のアイズアツフェは大量の雪を生み出して雪の波を火群に向けた。

津波のごとく押し寄せる雪は火群の炎を掻き消し、火群に襲いかかる。

「景朗！」

ようやく届いた声で火群は我に返った。向かい来る雪の波に火群はとっさに反応できなかった。目を見開き立ち尽くす。

と、その体が優しい風に包まれる。滋生の天狗扇が起こした風が火群を上空へ押し上げた。

土師も同じように風の膜につつまれて浮遊している。だが、滋生の姿がない。

「おい、天狗女!?!」

慌てて眼下を見れば、滋生は胸を押さえてうずくまっている。その目前には白い大波が迫っている。

「何やってんだ!! 早く来いよ!!」

滋生は胸を押さえたまま、緩慢に顔を上げた。ふと、なぜか滋生が面の下で笑ったような気がした。

直後、滋生の肢体が雪に飲み込まれる。目を見開いた火群は、唇を震わせて叫んだ。

「織イイイイイツ!!」

二人は白銀の世界に降り立った。滋生が白い大波に飲み込まれた後、風の膜はゆっくりと降下していき、消えた。

「火群、オレが中に入って滋生を探してくる。お前は班長に連絡してくれ」

「……………」

「火群！」

呆然としていた火群は土師に揺すられて、力なく頷いた。土師は滋生がいた付近から“透化”で雪の中へと潜っていった。

雪中を進んでいくと、見覚えのある褐色の翼が見えた。土師は上に戻り、ヴァモバでテイラーに連絡している火群を呼んだ。

「火群、この下に滋生がいる。炎で雪を溶かしてくれ」

「…お、おう」

火群は慎重に周りの雪を溶かしていった。滋生の周囲だけの雪が解け、穴があく。

その中にくつたりとしている滋生が見えた。途端に火群は滋生のそばに飛び降り、駆け寄った。

「織！」

滋生の体を抱き起こす。滋生の体は冷え切っていて、体温は全く感じられなかった。

「おい、しっかりしろよ！ おい！」

面はあの波の中でも外れることがなかったようで、顔は面に覆われたままだ。呼び掛けると、微かに滋生は身じろいだ。

「織！」

「…………… かげ……………？」

「大丈夫か、しっかりしろよ！」

「…あんだ…今、初めて…名前で呼んだね……………」

「！」

途切れ途切れの声で滋生は言った。火群はくしゃりと顔を歪め、滋生の冷たい体を支える手に力を入れた。

「うれしい…よ……………あんたには…名前で、呼んでほしかった……………」

「しゃべんな。すぐレスキューが来る。黙ってる」

「…ダメだよ…あたいはもう…もたない……」

「ふざけたこと言うんじゃねエ！ テメエは天狗族なんだろ！ このくらいでくたばるかよ！」

「景朗……」

「くたばんなよ……名前呼んでほしいなら…仕方ねエから呼んでやる。だから……」

肩を震わせる火群。滋生は持っていた天狗扇を放し、火群の頬に手を伸ばす。もう片方の手で、滋生は初めて面を外した。

「！」

火群は息を呑む。さらされた素顔はとても美しかった。力なく微笑んでいるその顔は、死の間際だというのに幸せそうだった。

「ふふ…素顔を見せるのは…あんたが初めてだよ……それから……」

一度手放した天狗扇を震える手で持ち上げ、差し出す。

「これ…あんたに、あげるよ……あんたに、もらってほしいんだ……」

火群は悲痛な顔でその天狗扇を受け取った。滋生はずっと笑っている。顔は青白く、生気はほとんど失われているのに。

「ねえ、景朗……天狗族は…心を、許した相手にしか…素顔を見せちゃいけない、て…知ってるかい…？」

あたいはね、もしそうするなら…あんたがいろいろ…思ってたんだよ……」

「なん…で……」

自分でも驚くほど、声がかすれていた。滋生の体が一層冷たさを増し、死相が現れたからだ。

「……だって…あたいはさ……あんたの、ことが……」

それ以上言葉は続かなかった。

すつ、と頬に添えられていた手が落ちる。滋生の瞼も閉じられ、完全に動かなくなった。

「織？ 織！ おい！ 起きろよ！！ 俺のことがなんだってんだ

よ！ 最後まで言えよバカ野郎ッ！」
どんなに揺さぶってみても、滋生が再び目を開けることはなかった。

二人の頭上に、テイラーとレスキュー隊の乗ったヘリコプターが飛んできて、プロペラの起こす風に雪が舞い上がる。

土師は眩しそうにヘリを見上げた。火群の哀叫を聞き、穴の中で息絶えたであろう滋生を思い、哀しげに瞑目した。

事件はこうして幕を閉じた。犯人だったアイスアツフェは全員、雪の中から黒焦げ状態で発見された。

彼らが人間を襲った理由 それは、リーダー格の言った通り、ただ面白かったからかもしれない。

だが、宇賀尾山はここ数年、登山者のマナーが悪くなり、ごみを持ち帰らない者や、木々を傷つける者がいたという。

これは推測に過ぎないが、山に棲んでいる彼らは山を荒らされて怒っていたのかもしれない。

ヘリの中から宇賀尾山を見下ろし、テイラーは一人思いを馳せた。

火葬場の人気のない場所。うなだれて階段に一人座り込み、滋生が最期に遺した天狗扇を見つめていた火群は、横から近づいてくる人影におもむろに顔を上げた。

「隣、いいか」

火群は感情のなくなった顔で土師を見上げ、頷きもせず顔を戻した。それを許諾と受け取り、土師は火群の隣に腰を下ろした。

その後、レスキュー隊のヘリで滋生の遺体は丁寧に運ばれ、火葬されることになった。

しばらく互いに無言だったが、沈黙を破ったのは土師だった。

「滋生はな、少し前から病に冒されていたんだ」

滋生の名に、火群はぴくりと反応した。それでも天狗扇に視線を注いだままだ。土師はゆっくりと諭すように話す。

「人外だけがかかる病気で、確実な治療法はなく、先はそう長くはないと医者に言われていたそうだ。」

今まで言わなかったのは、あいつに、最後までお前といつもおりに接していたいからって、口止めされていたんだ。黙ってて悪かった。

けどな、お前に言わなかったのは、心配をかけたくなかったからなんだよ。つらい思いをさせたくなかったからだ。あいつの気持ちをつ分かってやってくれ」

「……………」

「火群。滋生はあの時には末期で、いつ倒れてもおかしくなかった。だから、あいつが死んだのはお前のせいじゃない」

「……………」

火群の扇を握る手が強まり、震える。土師はなるべく火群の方を見ないようにして言葉を続けた。

「それにな、あいつはお前と最後までいつもどおりでいたいっていう願いが叶ったんだ。きつと幸せだったと思うぞ」

「……………その、勝手じゃねエか。病気のこと黙ってて、願い叶えて、自分だけうれしい思いして逝っちまいやがって……！」

低い声で火群は言った。確かに、滋生の死に顔は幸せそうだった。けれど、残される自分は？

置いて行かれる方は決して幸せなんかじゃない。惚れた女が死ぬのを、目の前で、肌で実感した俺は。

好きだった。そばにいるうちに、好きになっていた。顔なんか見えなくなつてよかった。

一人の女として好きだったから、アネキなんて呼びたくなかった。名前を呼ぶのもためらうくらい好きで、意地を張ってずっと呼べずにいた。ようやく呼ぶことができたのに。

「いつも勝手すぎるんだよあいつは！ 何が心配かけたくなかった

からだよ！

こんな…突然いなくなつた方がつれエんだよ！！ 中途半端な言葉まで残しやがって！！ 伝えてエことがあんならちゃんと伝えるよっ！！」

叫んでも、もうその言葉は届かない。伝えたいことがあつたのに、もう伝えられない。

会いたくても、もう二度と、会えない。悲痛な訴えを聞いていた土師は空を見上げた。

秋の空は晴れていて、雲がゆるやかに流れていく。

「あいつは、伝えたいことは伝えていったと思うぞ。天狗族にはもう一つ、掟があるそうだ。自分の天狗扇を渡すのは、心から愛する相手のみ、ってな」

「……！！」

「言葉じゃなく形で、滋生はお前に想いを伝えていったんだ」

土師の言葉が終わると同時に、火群の目から涙が溢れた。歪む視界。

火群は天狗扇を顔に押し当てて、十数年ぶりに涙を流した。

「織…！ 織イツ」

体を丸めてむせび泣く火群。涙の粒が地面に落ちて吸い込まれていく。しゃくり上げる火群は、言葉を詰まらせながら傍らの土師に言った。

「…アニ、アニキは…俺より、先に…逝くなよ…？」

わずかに目を瞞つてから、土師は優しく微笑んだ。答える代わりに火群の頭を撫でる。幼子をあやすように、そつと。

話を聞き終えた僕たちは、静かに泣いていた。今の火群さんからは想像できない悲しい過去だ。

「火群さんに、そんな過去があつたなんて…」

【滋生さんも火群センパイもかわいそうですね。想い人と一生会え

なくなるなんて】

春希ちゃんもハンカチで涙を拭いている。天刻さんがコーヒーを淹れて僕たちに差し出してくれた。

その天刻さんも、悲しい過去を偲んでどこかやるせない様子だ。

「そうですね。いつかは誰にでも死は訪れるものですが、火群君にとつて、それはあまりにも突然で、深い傷となつていて、しょう」
今でも、火群は雪が降るとそのことを思い出すのか、元気がなくなる。

今日とて、表面上は普段と変わらない様子だが、内心はしんみりとしていたろう。

滋生からもらった天狗扇も大切に取つてあるらしい。

「二人とも、この話をしたことは火群君には内緒にして下さいね。

火群君の前で滋生君の名前は禁句になっていますし、勝手に話したと知つたらきつと怒りますから」

苦笑する天刻さんに、僕たちは首肯した。そこで、当の火群さんが給湯室に入つてきた。

「おい、こんなところで三人で何してんだ？　つて、コーヒー飲んでやがる！　俺にも飲ませろや！」

「わつ、はいはい、今淹れますよお」

一番近くにいた僕に詰め寄ってくる火群さん。僕は火群さんの力ツプを柵から出した。

火群さんは「あつちで待つてるからよ」と隊士室に戻る。あれで本当に丸くなつてるんだろうか。まあ、髪の色は金髪から黒髪になつてるけど…

「なんか、あんまり変わつてない気がする………そういうば」

トポトポとコーヒーをカップに注いで、僕はふとあることに気づき、疑問を口にした。

「天刻さん、さっきの話つて十年くらい前の話ですよ？　榊原総隊長つてその頃から“総隊長”だったんですか？」

今、総隊長は確か三十代半ばだったと思うから……さっきの話の時、

総隊長は二十代半ば。二十代半ばで総隊長なんてすごすぎる。

春希ちゃんも、今それに気づいたらしくて驚いた顔をしてる。天刻さんはなんでもない様子であっけらかんと返した。

「そうですねえ。あの人は私が入隊した頃から総隊長でしたよ」

「えええっ!?!」

初耳!　て言うか、天刻さんが入隊したのって二十年くらい前でしょ!?!　その頃から総隊長!?!　いやっ、て言うか年齢合わくない!?!

はっ。実は総隊長、年齢詐称してて、ホントは天刻さんより年上だったりする!?!　だったら天刻さんを名前で呼ぶのも頷けるけど…っ。

悩んでいると、天刻さんがくすつと笑った。

「気になりますか?　榊原さんのこと」

「も、もちろんです!」

だって、総隊長は総帥に次ぐ謎の人なんだから。藍泉国の全警吏庁をまとめているのが総帥で、総隊長は総本部・本部・支部のそれぞれの長官を表す。

総帥について分かっているのは『円藤』という名字だけで、顔も下の名前も、年齢も性別も声も不明。

人間か人外かすら分からないんだ。というより、本当に存在しているのかも怪しい。

総帥に直接会ったことがあるのは榊原総隊長だけんだけど、もしかしたら総隊長が一人二役を演じているのかも。

誰の前にも姿を見せないで、誰かと話す時は狼のぬいぐるみについた通信機で話す。

その声だって、機械で声が変わえられている上に、男の人と女の人と同時に話しているような声だし。

昔、総帥のことを調べた人がたくさんいたらしいけど、結局分かんない。僕も早々に諦めたよ。でも、総隊長ならまだ答えに手が届きそう!

「それでは、後ほどお話ししましょう。今は火群君にコーヒーを持っていかないとね」

「あ、そ、そうですね」

忘れてた。僕たち三人は隊士室に戻った。部屋の温度はだいぶ快適になっていたけれど、寒さが苦手な淑生さんは毛布にくるまってミノムシ状態だ。

「火群さん、コーヒーです」

「おうよ」

一応、淑生さんの分のコーヒーも淹れたんだけど、飲むかな？

「淑生さん、コーヒー飲みますか？」

「…うゝ…飲むう」

毛布から顔を出し、手を伸ばす淑生さん。

「熱いですから気をつけて下さいね」

淑生さんにカップを渡すと、僕は壁に寄りかかって立っている天刻さんのところに行った。

「じゃあ、話の続き聞かせて下さい」

「何々？ なんの話？」

真愛良ちゃんが興味を示して、“念動”で自分の体を浮かせながら僕の隣に滞空する。

「天刻さんが総隊長のことを話してくれるんだって」

「ほんとーっ？ まいらも聞きたーい！」

「へえ、ちよつと興味あるな」

「榊のオッサンの話ねエ。聞いてやってもいいかもな」

他の二人も興味津々みたい。でも、淑生さんだけは話の輪に加わってこなかった。

淑生さんって、総隊長が苦手なんだよね。その理由もこの話で分かるかな？

僕たちはデスクのイスに座ったりして静聴の態勢を取る。

みんなでこんなにおとなしく誰かの話を聞くのは、総帥が話をする時くらいだ。それくらいみんな真剣だった。

やがて、天刻さんが語り始めた。

肆（後書き）

追伸列記簿

特ゆかのみ読者さまにはお久し振りです。それ以外の方にはこんにちは。

秋らしくなって長袖でいいやと思いきやいまだ半袖で過ごしている甲斐日向です。

特ゆか四話更新遅くなり申し訳ありません。はわわわ、もう三週間くらい経ってるやないか。

ちよつと、私生活がごたごたしてまして…ササラの方も進めないとだし…なんてやってたら、すーっかり忘れてました。

これでようやく火群の入隊編は終了。はー、死ネタ好きやねえ。書いてて自分で泣けちゃったよ、ははん。

火群にまさか好きな人がいたとは…ありがちなネタでしたがどーでしょーか。

この時から火群は土師さんラブ（違うから）になったんですねえ。十年近く経つても、火群は土師さんにだけは頭が上がらず…いまだにアニキーアニキー言ってますよ（笑）

ちなみに、火群が黒髪に戻したのは土師さんみたいになりたかったからという裏設定もあったり。

……なんだほむらんっ、ラブラブだなお前！ そんなだから裏ネタにされるんだっ。

滋生は結構お気に入りでした。火群と対等に話ができる女性でしたので。死なずに火群とくっついてくれてたら、もう少し違う話になっただんでしょようにね。

さて、お次は天刻さんともしかしたら陽向？ 彼の正体が明らかになるかもしれせん。でもいつ更新できるか分かりません。

それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

伍

藍泉歴二〇〇八年、春。警吏庁総本部内で話題を呼んでいる男がいた。

「おい、聞いたか？ 今年入った新人の中にすげー奴がいるんだってよ」

「ああ、筆記、実技ともに歴代トップなんだって？」

「その人がね、すっごい背高くてスラッとしててカツコイイのよ！」

「しかも噂だと、王族なんだってよ」

「キヤーツ、じゃあもしお近づきになれば玉の輿！？」

噂は総本部すべてに広まっていた。そして話題の本人はというと……

「まったく、どこから聞きつけたのやら。確かに僕は王族だよ。でも、自慢じゃないけど、僕は実家からあまりいい目で見られてないんだ。だからいろいろ期待されても困るんだよね」

黒髪に灰色の切れ長の瞳。彼は肩をすくめ、大仰にため息をついた。

「警吏隊に入ったのだって、実家の連中に目にも見せ……もとい、僕が本当はできる人間だって驚かせるためなんだからさ。ねえ、柎周？」

後方を振り返って、青年は付き従う少年に同意を求める。黒髪に細い茶褐色の瞳を持つ少年は、無表情でただ「はい」とだけ返した。少年は天刻柎周、十六歳。青年は汐見柳太郎しおみりゅうたろう、十八歳。彼らは今年、警吏隊に入隊した新人警吏。

天刻家は汐見家に仕える一族で、天刻は汐見の問題児と言われる彼の従者である。

「もう、ほんとかつたるいよ。実技は楽しいけどさ、講義とか超眠くなるし。それにみんな勘違いしてるよ。実技も筆記もトップだったのは、僕じゃなくて柎周なのに」

「柳太郎様だつて三位だつたではありませんか」

「あんなのまぐれまぐれ。ちよつとヤマカンが当たつただけだよ」
後頭部で手を組んで、柳太郎はどうでもよさげに言う。天刻は小さくため息をついた。

警吏隊の試験はレベルが高い。ヤマカンでも三位の成績を取れたなら充分頭がいいのではないだろうか。それでも名門の汐見家の中では落ちこぼれなのだ。

彼にはたくさんいいところがある。そりゃあ、面倒臭がりだし飽きっぽいけれど、子供や老人には優しく、弱い者を助けようとする義侠心がある。

(どうして周囲の人間はそれを解ろうとしないんだ)

天刻が苛立ちを募らせていると、さらに苛立たせる者が現れた。

「そこにいるのは我が汐見家一の問題児君じゃないか」

二人が振り返れば、黒い長髪を三つ編みにしている銀縁眼鏡の青年。柳太郎は「出たよ…」と苦虫を噛み潰したような顔で呟いた。

「まったく、真実を知らない奴らはお気楽だな。こんな奴が歴代トップの成績を取るわけじゃないじゃないか」

嫌味たらしい笑みを浮かべて二人を睥睨するこの男は、汐見亮司。

柳太郎の従兄弟で二十歳。二人と同じく今年入隊したばかりだ。

そして天刻に続く歴代二位の成績を取ったのが彼である。

「あんな噂があるからつていい気になるなよ？ あれは柎周の業績であつてお前のじゃない」

「いい気になんかなつてないし」

「どうだか。見栄っ張りなお前のことだから、これ幸いと天狗になつてるんだらう？」

わざとらしく肩をすくめて嗤う亮司。見栄っ張りなのはあんだらう、と柳太郎は心中で呟いた。

「柎周も苦労するな。こんな奴が主だなんて。なあ、柎周。こんな奴に仕えるのはやめてオレのものになれよ」

「は…？」

困惑気味に眉をひそめる天刻。

「オレは優秀な者しか使わない。オレより成績が良かったのは大目に見てやるう。お前は見所があるからな。オレのところに来れば優遇してやるぞ」

「もったいないお言葉、ありがたく存じます。ですが、俺の主は柳太郎様お一人。亮司様にお仕えすることはできません。それに、亮司様にはもう優秀な従者がいらっしやるでしょう？」

天刻は亮司の斜め後ろに立つ銀髪の少年を見やる。亮司より頭一つ分ほど低く、不安げな表情で俯き加減に佇んでいる。

「ああ、確かにエリオットは優秀な従者だったな。だが、落ちこぼれに負ける役立たずなどもういらん」

少年 エリオットの方を見もせず亮司は言った。びっくり、とエリオットの肩が跳ねる。しかし亮司は全く気にせず、笑顔で天刻に手を差し出した。

「ちょうど新しいのが欲しかったんだ。さあ来い、柎周」

天刻は目を睨り、亮司の後ろで震えているエリオットを見た。彼は亮司の従者の中で最も長く仕えていた従者だ。

傲慢で自己中な亮司に、ただ一人仕え続けた純朴な少年。それなのに亮司は目の前であっさり切り捨てた。天刻はエリオットの心中を察し、痛ましそうに顔を歪めた。

「お前はたった一つの汚点さえ除けば最も優秀な従者だ。柳太郎なんか見限れ」

「！」

亮司の何げない言葉に、天刻の胸が痛んだ。柳太郎が真剣に顔を険しくする。

「どうせ柳太郎に仕えているのも、その罪悪感から
ひゅんっ

亮司の頬を、何かがかすめる。それは柳太郎の繰り出した拳だった。怒りの表情で、柳太郎は亮司の顔の横に拳を出したまま、低い声で告げる。

「それ以上口を開くな。人を物扱いするのもいい加減にしろよ。エリオットは一途にあんたに仕えていたじゃないか。なのに、役立たずだからいらぬなんて、本人を目の前にして言うことじゃないだろ。」

それに、僕のことを悪く言うのは別に構わない。でも、柁周をバカにするのは絶対に許さない。柁周は僕の従者だ。誰にも譲らない！」

亮司を睨みつけ、柳太郎は啞然としている柁周に「行くよ、柁周」と促す。天刻は慌てて亮司に一礼して、ずんずんと歩いていく柳太郎の後を追った。

「あの…亮司さま…？」

固まっていた亮司は、エリオットの控えめな声で我に返った。泣きそうな顔でエリオットは亮司を見上げている。亮司は舌打ちをし、去っていく柳太郎たちの背中を睨み据えた。

「柳太郎様、どこへ行かれるんですか!？」

早足で先に行く柳太郎は、警吏庁本部内をめちやくちやに歩いている。天刻は半ば駆け足で追いかけた。

その時、資料を見ながら歩いていた、警吏庁本部総隊長の榊原陽向の前を通り過ぎた。

「おや？」

気づいた陽向は顔を上げ、駆け抜けていった天刻の背中を見る。

「あの子……」

陽向は天刻を見つめて意味深な笑みを浮かべた。

「かなり強い力を持っているな。けれど、ずいぶんと心が氷っている。ふむ」

あごに手を当て、陽向は歩きながら思索した。

「待つて下さい、柳太郎様！」

建物の外に出て裏庭まで来ると、ようやく柳太郎は止まった。くるつと振り返ると、柳太郎は息一つ乱していない天刻と正面から向き合った。

「ごめんね、柁周」

「え？」

「亮司の奴、ひどいこと言って……」

「柳太郎様が謝ることではありません」

「うん。でも、あんな奴でも一応身内だから。従者相手だろうと、身内が無礼をしたら謝らないと」

ため息をつく柳太郎に、天刻は無表情で礼を言った。

「ありがとうございます」

「……いっつも思うんだけどさ、柁周って笑わないよね」

「はい？」

柳太郎は半眼で天刻に詰め寄る。

「笑わないって言うてんの。お礼言うならさー、それなりの顔つてものがあるでしょー。何か分かる？ 笑顔だよ、え・が・お！」

「はあ」

「はあじゃなくてさー、笑おうよ、柁周。君とは十年以上一緒にいるけど、君が笑ったとこなんてあの時以来見てないよ」

天刻の顔が強張る。俯きかけた天刻の両頬を、柳太郎がむにゅとつまんだ。

「まだ気にしてんの？ あれは僕が悪かったんだ。僕の命令に君が逆らえないことに調子に乗って、無理やりやらせたから」

「……………」

「十年も前のことだよ。悪いのは君じゃないんだから気に病むことはないんだ。そんなに自分を責めないでよ。責められるべきなのは僕の方なんだから」

柳太郎は微笑んだが、天刻は何かを堪えるように顔をしかめ、咳いた。

「……あなたがなんと言おうと、俺は自分を許せません」

「柁周……」

「俺はっ、主であるあなたを死にかけさせた!!!」

柳太郎の手を振り払い、天刻は叫んだ。

天刻は先天性の異能者だった。十年ほど前、天刻の“魔眼”に興味を持った柳太郎が、能力を使うところを見せてほしいと言った。

天刻は自分の能力があまり好きではなかったため、できないと断った。だが、どうしても見たかった柳太郎は命令をした。

『いいから、僕に“魔眼”使ってよ。これは命令だからね』

命令をされれば、従者である天刻は主の柳太郎に逆らえない。嫌々ながら、天刻は“魔眼”を発動させた。“魔眼”は目を合わせた者に幻覚を見せるもの。天刻が柳太郎に魔眼を使い、柳太郎は幻覚の世界に入り込んだ。

幻覚の世界ではしゃいでいた柳太郎は誤って階段から転落し、意識不明の重体となった。すぐさま病院に運ばれたが、数日間生死の境をさまよった。

事件後、天刻は両親から厳しく咎められ、折檻を受けた。何日も食事を与えられず、懲罰房に閉じ込められたのだ。

意識を取り戻した柳太郎は天刻の両親に、涙ながらに訴えた。

『柁周は悪くない！ 僕がやれって言っただんだ！！ だからもうやめて!!! 柁周は悪くないよっ！ 柁周をあそこから出して!!!』

やつれて出てきた天刻に、柳太郎は何度も何度も謝った。

折檻と両親の再教育を受けてから、天刻は笑顔を失った。十年の月日が流れた今も、天刻が笑うことはない。

「その事実が消えない……本当は、柳太郎様にお仕えすることすら許されないんです。その資格がない。」

柳太郎様が落ちこぼれだと、親類の方々から白い目で見られる真の理由だって……」

顔を覆い、嘆く天刻の肩を柳太郎がつかんだ。

「柁周」

「罪人の俺をそばに置いているからじゃないですか！」

「枉周っ」

「こんな俺が…柳太郎様に、ましてや亮司様にお仕えするなんて、身の程知らずも甚だしい。俺はあなたのそばにいない方がいいんだ！」

天刻は柳太郎の手を振り切り、駆け去った。柳太郎が名を呼んでも、天刻が立ち止まることはなかった。

柳太郎のそばから逃げ出した天刻は、ひと気のない場所を求めて本部敷地内をうろついていた。

（俺はなんてことを……柳太郎様、心配しているだろうか）

あの人のことだから捜し回っているかもしれない。でも、今すぐに会う勇氣はなかった。

さっき言ったことはすべて本心だ。柳太郎が陰口を叩かれる時、自分のことが必ずと言っていいほど出てくる。

（俺が従者だから、柳太郎様が悪く言われる。なら、俺がいなければあの人が悪く言われることはないんだ。

柳太郎様自身の能力は高いのに、周りの奴らは、俺がそばにいるというだけで柳太郎様本人を見ようとしない。俺さえ…俺さえいなければ…）

「あまり心を氷らせない方がいいよ」

突如背後から聞こえた声に、天刻は振り返った。真後ろに立っていたのはにこやかな笑顔の男性。

「わあっ！」

「おやおや、驚かしてしまっただかな？」

「あ…あなたは、榊原総隊長！」

慌てて天刻は敬礼する。柔らかそうなココアブラウンの髪に若葉色の瞳。入隊試験や入隊式の時に見たことがある。

陽向は軽く手を上げて「ああ、楽にしているよ」と笑う。直接話

をするのは初めてで緊張する。

「君と話をしたいと思っていたんだ。ちょうど一人になってくれてよかった」

「自分と話を…ですか？ どのような御用件でしょうか？」

「そんなに畏まらなくていいよ。もっとフランクに行こう。ね？」

「は、はあ……」

なんだか変わった人だな。天刻は戸惑った。

「さつきも言ったけれど、あまり心を氷らせない方がいい。氷りついた心は闇を生み、魔を呼び寄せるからね」

「心を氷らせる…？ どういう意味ですか」

陽向は意味ありげに笑うと、腕組みをして説明した。

「人間はね、心に深い傷を受けたり、強い悲しみや憎しみなどを抱くと、心が壊れてしまうのを防ぐために氷らせて守ろうとする。それが心を氷らせるということ。もちろん、実際に氷になるわけじゃないよ。」

ただね、心が氷まるということはそれだけ負の感情が強いわけだ。たいていの人間は、傷を負ったり悲しい思いをしても、時が経てば自然と癒えていく。けれど、中にはどれだけ時が経っても心が癒されず、氷らせてしまう人間もいる」

「俺は…そんな人間の一人ということですか？」

強張った表情で問う天刻に、陽向は頷いた。

「強い負の感情によって氷った心は闇を生む。その闇に惹かれ、魂を喰らうために魔は近づいてくる。昆虫が木の甘い汁に惹かれてやつてくるようなものだね。負の感情は魔性のものの餌だから」

例えば分かりやすいが、なんだか軽い言い方だった。けれど、嘘を言っているようには見えないし、総隊長の言う通りだとしたら、このままでは自分は危険な目に遭うということだろうか。

「どうすれば…いいんでしょうか。俺の心は氷っているんでしょう？ 氷った心が魔を呼ぶなら…それでもし本当に魔を呼んで、それで誰かを巻き込んだりしたら……」

自分が魔に喰われて死ぬだけなら、願ったり叶ったりだ。柳太郎のそばを離れれば柳太郎が見下げられることはなくなるだろう。

だが、喰われるために周囲の人間　柳太郎に危害が及ぶのだとしたら。そんなのは嫌だ。

うなだれた天刻に、陽向は微笑みながら近づいていく。

「大丈夫。氷ってしまったなら解かせばいい。解かしてもすぐには傷は癒えないけれど、闇の成長を止めることはできる」

「そんなことどうやれば……」

顔を上げた天刻の前に、陽向は手から緑色の炎を出して見せた。

「！　炎！？　総隊長、“発火”能力者なんですか？」

「炎使いではあるけれど、正確には違う。私はね、神狐しんこなんだ」

「神狐！？」

神狐は狐の神だ。火を操るため、炎神とも言われる。総隊長が人外だったとは。それも神族。天刻は驚愕して絶句したが、陽向が出した炎を近づけてきたので狼狽する。

「なっ、何をするんですか！？」

「心配ない。これは癒しの炎。燃えることはないから安心なさい」
「わっ……」

陽向は緑色の炎を天刻の左胸に入れた。一瞬熱さを感じたが、確かに燃えはしなかった。天刻の胸の中で炎が燃え上がる。天刻は胸の奥に熱を感じた。

どくん、どくと胸の奥で炎が脈打つ。天刻はずっと自分を責めてきた。柳太郎の命を危険にさらしたにもかかわらず、柳太郎のそばにしていることを。両親の折檻を当然の報いとして受けた。親類たちの暴言も。

大切な主をこの手で傷つけた恐怖。両親の容赦ない折檻への恐怖。主のそばにいる恐怖。それらが今、少しずつ和らいでいく。

「ん。もう大丈夫みたいだね。今の気分はどうだい？」

「……なんだか、妙にすつきりしてます」

「よかった。君の心の氷は癒しの炎で解けたよ。でも、完全に傷口

が塞がったわけではないからね。また君が負の感情に満たされれば、再び氷は心を包むだろう。そうならないように、^{つよ}勁くならないとね」
にっこりと笑う陽向。天刻は細い眼を開けて陽向を見つめた。

初めて、自分の弱さを見抜いたヒト。心の傷を癒してくれたヒト。強く、優しい言葉をくれたヒト。こんな風に、自分もなれたら。

「はい…！ ありがとうございます！」

「ああ、それと。君は異能者だよな？」

「は、はい…」

「能力は何かな？」

天刻は言葉に詰まった。氷が解けたといつても、すぐに吹っ切れるものでもない。それでもなんとか答えた。

「…“魔眼”、です」

「“魔眼”か。ふむ。使えるな。天刻君、君、特殊課に入らないかい？」

「え？ 特殊課、ですか？」

研修期間だが、天刻は今、刑事部第六課にいる。六課はヒューマンノイド犯罪やコンピューター犯罪などを担当する。六課は変わり者が多いと言われているが、特殊課はそれ以上に変わり者が多いという。

異能者や人外のみで編成されている特殊課。天刻は異能者なので該当すると言えばするのだが…

「でも…それって、俺だけ…ですよ？ 俺は柳太郎様について警吏隊に入りました。できれば、柳太郎様と同じ部署にいたいんです」
「そうか。まあ、君が異能者であることを他の人間は知らないだろうし、常人として今の部署にいてもいいけれどね。」

君のその力が事件解決に繋がるかもしれない。誰かを助ける力になるかもしれない。誰かを守る力になるかもしれない。そのことを覚えていてほしい。よく考えてみてくれ」

陽向は踵を返し、建物内に戻って行った。天刻は困惑気味にその背中を見つめていた。

「あーっ、いたー！」

背後から柳太郎の声が響き、天刻は振り返った。途端に柳太郎が、ドーン！ と両手で突き飛ばしてきた。

「柎周あーっ！ このばかちん！」

「……………」

頭から近くの茂みに突っ込み、天刻はのろのろと体を起こした。

「僕一人じゃ迷うんだから一人にしないでよ！」

怒るところはそこのか。頭についた葉っぱを払い落としながら、

天刻は柳太郎と向かい合う。

「すみません」

「もっつ。君は僕の従者なんだからね。いつもそばにいてくれなきや」

柳太郎は右手の甲で軽く天刻の胸を叩く。天刻は一拍置いて、ふ…と表情を緩めた。

「はい」

天刻は笑った。十年振りに。柳太郎は目を見開き、次いでわたわたと慌てた。

「ま、柎周、笑…笑った！？ うわ、柎周が笑ったーっ。どうしたの急に！ いやうれしいけどさ！」

「総隊長のおかげですよ」

「総隊長？ え？ 何、会ったの！？」

「はい。しばらく前までここに。あの人のおかげで、心が軽くなりました」

「そっかー、総隊長が…でもちよつと残念」

「何がですか？」

問いかけると、柳太郎はくるつと背を向け、俯いて歩き出した。

「柎周の傷を癒したのが僕じゃないってこと。傷の原因である僕に癒せるわけないんだけどさ。でも僕は柎周の主だから…やっぱり僕

が癒してあげたかった」

足元にあつた小石を、コツンと足先で軽く蹴る。柳太郎の背中がさみしそうで、天刻は迷った。

この人のそばにいたい。いなくてはならない。けれど、総隊長の言葉が重くのしかかる。

自分の力が、本当に役に立つのなら。誰かを助けられる力を持ちながら、その力をふるわないなら、持つていても意味がない。

力を使うのはまだ怖いけれど、この力を必要としてくれる人がいるなら、特殊課に入るべきかもしれない。天刻は決心した。

「柳太郎様」

「ん？」

そばにいたいと思う。いてほしいと、いなくちゃダメだと言ってくる。必要としてくれるのはとてもうれしい。だから。

「俺：特殊課に入ろうかと思えます」

他にも必要としてくれる人がいるなら、その人たちのためにも、この人のそばにだけいてはいけない。

柳太郎はきよんとしている。天刻は目を逸らしたかったが、目を逸らしたら何も変わらない。

「さつき、総隊長から特殊課に入らないかって誘われたんです。俺は異能者だから入るべきでしょうけど、そうすると柳太郎様のおそばにはいられません。俺は柳太郎様の従者です。常におそばにいないてはいけません。おそばにいたいです」

「だったらいいじゃない？ 異能者だからって、絶対に特殊課に入らないといけないってわけでもないんだろ？」

「はい。でも、俺の力を必要としてくれてるんです。この力を役立てることができるなら、あなたのおそばを離れてでも行くべきかと」

天刻の細い眼に宿る強い意志。柳太郎はすつと目を細めて腕を組み、真剣な顔つきで睨むように天刻を見る。

「従者の任を放棄するっていうの？ 僕はそばにいろって言ったよ

ね？ 僕にずっと仕えるつて。その言葉に逆らうんだ」

天刻は柳太郎のまつすくな視線に怯みかけた。柳太郎が本気で怒ることはあまりない。こんなに真剣に怒りのこもった目で見られるのは初めてかもしれない。

しばらく無言で睨んでいた柳太郎だが、小さくため息をつくど、

「ま、いいよ」とあつさり返した。

「え……あの、いいん、ですか？」

逆に不安になる天刻。柳太郎は後頭部で手を組んで頷いた。

「うん。柁周が自分で考えて決めたんならそれでいーよ。僕もいつまでも君に甘えてるわけにいかないしね」

「で、でも……」

うるたえ始めた天刻に呆れた柳太郎は、腰に両手を当てて上目遣いに見上げる。

「もうっ。決めたんじゃなかったの？ 僕に『特殊課に入れ』つて

言われなきゃ入れないわけ？」

「そついうわけでは……」

肩をすくめ、柳太郎は姿勢を正して天刻ときちんと向かい合う。

「そりゃあそばにいてほしいと思うし、柁周がいなくなったら寂しいよ？ だけど、君だって一人の人間だ。君なりの考えや気持ちもある。そうだろ？」

従者は主に従うのが当然。けどね、従者は奴隷じゃない。主の言うことやることすべてに従う必要はないんだ。時には逆らったつて、怒ったつていいんだよ。自分だけの道選んでも、いいんだよ」

その言葉に、天刻は目頭が熱くなるのを感じた。俯き、涙を堪える。

「……はい。はい、ありがとうございます。柳太郎様。俺は……あなたにお仕えできたことを心からうれしく思います」

顔をあげ、天刻は笑顔で宣言する。

「これから俺は、あなたのおそばを離れます。ですが、いつでも俺はあなたの従者です。心はいつまでも、あなただけの従者です！」

柳太郎も顔を綻ばせ、「当然！」と歯を見せて笑った。

「と、言うわけです」

話し終えた天刻さんは人差し指を立てて笑った。なんだか、総隊長の話じゃなくて、ほとんど天刻さんの話だったけど…総隊長つてやっぱり人外だったんだ！

「神狐ねえ。どうりで火を操れたわけだぜ」

納得した様子で火群さんが言った。土師さんが「結構長く一緒にいたけど、初めて知ったな」と、話の途中で用意したお菓子に手を伸ばす。

「狐の神様なんてカワイイ〜ッ。まいら、総隊長の狐の姿見てみた
ーい」

総隊長の狐姿を想像しているのか、真愛良ちゃんが興奮気味に言う。総隊長の狐姿かあ。僕もちよつと見てみたいかも。

それにつけても、神族つて淑生さんだけじゃなかったんだ。あ、もしかして淑生さんが総隊長苦手なのは、神族同士つてことが関係してるのかな？

【どうして総隊長は、人外つてことを隠しているんでしょうか】

春希ちゃんがスケッチブックを見せると、天刻さんがお茶を飲みながらのんびりと答えた。

「別に隠しているわけではありませんよ。公表していないだけで。

古株の隊士の中には知っている人もいますし、ただ周りに言わないだけです。広めることでもありませんしねえ」

「そうだったんですか。総隊長のことも驚きましたけど、天刻さんて元は六課所属だったんですね」

「研修期間の初めのうちだけでしたけれどねえ」

「汐見隊士つて今も警吏庁にいるんですか？」

「いいえ、十五年ほど前に退職されて、今は汐見家の当主となられています」

「ねえねえ、天おじさま。さっきの亮司って人、もしかして第二課准隊長さん？」

真愛良ちゃんが頬に人差し指を当てて考えながら問いかけると、天刻さんは「そうですよ」と頷いた。

だ、第二課准隊長って、すごく厳しいことで有名なあの人！？
そう言われてみれば、第二課准隊長の名字は汐見だったっけ……

基本的に、どこの課の人も他課所属の人の顔や名前を覚えている人は少ない。長年、警吏隊にいる人は別として。

僕だって捜査の応援で時々、他課の人と一緒に行動することはあるけど、あんまり顔と名前は覚えてないんだよね。

「よく分かったねー、真愛良ちゃん」

「えへへー、だってまいら、警吏隊歴長いもん」

「木下君はこの班内では私を含め、土師君と火群君に次いで長いですからねえ」

「えっ、そうなんですか!？」

てっきり淑生さんなのかと思ってた。真愛良ちゃんは三班の中では一番若いし。

「じゃあ今度はまいらがお話ししてあげるーっ」

くるりと空中で踊るように回った真愛良ちゃんがウインクする。

今度は真愛良ちゃんの入隊時の思い出が聞けるみたいだ。楽しみだなあ。

伍（後書き）

追伸列記簿

どうもこんにちは！ ほぼひと月ぶりの更新ですね。今回は天刻さんの過去話（&総隊長の正体）です。

昔の天刻さんはまったく笑わない人でした！ それが今のようになったのは陽向がきっかけ。あんなふうになりたい！ という憧れから陽向の言動を真似ていたら、今の天刻さんになっただけです。

そして、またもや新キャラの柳太郎と亮司。柳太郎はハツラツとした少年、亮司はクールなイヤミ青年のイメージ。亮司は書いててなんて奴だ！ とムカついてました（笑）

過去話はこれで二人目。まだ二人目なんですよねえ。あと五人もいるわ。でも残りの人たちはたいしてドラマがないので、すぐ終わると思います。特ゆかもあと何話かで終わりですよ。

次回は真愛良とその他。誰が来るかは今の時点ではまだ考えていません。それでは次回の追伸列記簿でお会いしましょう。

陸（前書き）

>br<この回は、本編に環境依存文字を含むため、ケータイ閲覧の方はお手数ですが、作者運営のサイトにあるケータイ向けのものからご覧下さい。サイトへは小説情報の作者ページから行けます。

>br<>br<

陸

真愛良が警吏隊に入ったのは十歳の時だった。その二年前、真愛良は総隊長にスカウトされた。

「えへへ、いづくよー」

半分ほど水の入ったバケツを、真愛良は“念動”で宙に浮かせた。数人の子供たちがわくわくと熱い視線でバケツを見上げている。

真愛良は生まれつき“念動”を持っていて、ご近所でも有名だった。

公園の入り口付近の木の陰に隠れた真愛良たちは、通行人が来るのを待ち受けていた。

そこに一人の中年の男性が通りかかり、真愛良は「えいつ」とバケツの中身を通行人にぶちまけた。

「うわああっ」

「やったやったー、大成功」

「これで三人目だね、真愛良！」

「きやははは」

男性の服は左側が見事に濡れていた。飛び跳ねるように喜んでいる子供たちを、男性が呆れと怒りの混じった顔で見る。

「またお前たちか！ いい加減にしろ！」

「引つかかる方が悪いんだもん」

反省の色を見せない真愛良と子供たちは、転がったバケツを持って公園の中へ駆けていく。

この頃の真愛良はご近所でも有名な悪ガキだったのだ。

毎日のように“念動”を使ってイタズラばかり。大人たちは真愛良の両親に何度もやめさせるよう言っているのだが、両親は「ちょっとくらいおてんばな方が可愛げがある」と取り合ってくれない。

そして次の犠牲者を待っていた真愛良は彼と出会ったのだ。

通行人を見つけ、真愛良は水の入ったバケツを宙に浮かせる。通

行人が木の前を通り、バケツを傾けた時だった。その通行人はバケツの水をひらりとよけた。

「！」

「え！？」

バケツをよけられたのは初めてだ。子供たちは驚いて通行人を見つめる。

通行人は木の陰に隠れている真愛良たちを見つけ、にこりと笑いかけてきた。

「おやおや、やんちゃん子どもたちだねえ。うちのおチビさんたちもこれくらいやんちゃだと面白いのだけれど」

柔らかかそうな茶色の髪と緑の瞳。三十代前半くらいの男性はじつと真愛良を見下ろす。

「君が木下真愛良ちゃんだね？」

「そうだけど、おじちゃんは？」

真愛良はくりつとした大きな目で男性を見上げた。

「おじちゃんは榊原陽向。警吏庁総本部の総隊長をやっているんだよ」

「警吏庁？ おじちゃんは警吏隊士なの？」

「そうだよ。君を警吏隊にスカウトしに来たんだ」

膝を折って真愛良と視線を合わせた陽向の言葉に、真愛良は目を瞬かせた。

そのあと、真愛良は両親と話がしたいという陽向を家に連れて行った。

父親は仕事でいなかったたので、母親が応対した。二人はリビングで真愛良を交えて話をする事になった。

「そういうわけですので、お嬢さんを警吏隊特殊課に招き入れようかと思っています」

「まあまあまあ、まいらちゃんが警吏隊士？ この子に務まっちゃうかしら？」

フリルのついた緑色のロリ服を着た母親は、両頬に手を当ててほ

けつと言った。

真愛良のゴスロリ趣味はこの母親からきているようだ。

「ただ、警吏隊士になれるのは十歳からです。お嬢さんはまだその年齢に達していませんから、その年齢に達してから入隊ということになりますか」

「あらあらあら、そうなんですか？ ん〜、まいらちゃんはどうかちやいたい？」

「まいらねえ、入ってもいいよ」

「まあまあまあ、じゃあそついうことで」

母親と真愛良はよく似た顔でにっこり笑った。こうして真愛良はあっさりと警吏隊に入隊（予定）となった。

その噂は早くも町中に広まった。単純に警吏隊士になるということで喜ぶ者もいれば、あのイタズラ娘に警吏隊士が務まるのかと危惧する者もいる。

しかし、その日を境に真愛良はほんの少しだけ真面目になった。ほんの少しだけ。

そうして二年後。

「がんばるのよ〜、まいらちゃん。ママ応援しちゃってるから」

「パパも真愛良の雄姿を想像して無事を祈ってるからね！」

「うんっ、まいらガンバル！」

初登庁の日、真愛良は両親に見送られ、迎えに来た陽向とともに警吏庁に向かった。特殊課は総本部のかなり端の方にあつた。

真愛良が案内されたのは第三班のプレートが掛けられた部屋。そこで真愛良は天刻や土師たちと出会う。

「おや、榊原さん。その子が新しいお仲間ですか？」

天刻が笑顔で近づいてくる。窓を開けて窓際でタバコを吸っていた土師と火群もこちらを見る。

「ええ、そうです。木下真愛良くん、十歳です」

「十歳だあ？ まだまだガキじゃねえか。こんなんが警吏隊士たアな。警吏隊も格が落ちたもんだぜ」

鼻で笑う火群に、土師はタバコを灰皿の上で消しながら軽くたしなめる。

「そういいうまい方をするなよ、火群。警吏隊に格なんてあるようではないものだし」

土師の肩に薄灰色の綿埃のようなものが降りてきた。手のひらサイズで、糸のようなものが一本出ている。

「そうだった。カワイイ女の子でいいっち」

綿埃がしゃべった。真愛良はぎよっとしてその毛玉を見る。土師と火群がこちらへやってきて、綿埃はよく見ると小さな目と口があった。

「真愛良くん、紹介しよう。こっちの細目のおじさんが天刻柁周くん。眼鏡のおじさんが土師昂行くんで、目つきの悪いお兄さんが火群景朗くんだよ」

「ねえねえ、その毛玉なに？」

真愛良の視線は綿埃に注がれている。綿埃はふわりと浮いて、真愛良の顔の前まで降りて憤慨する。

「ポクは毛玉じゃないっちい！ポクは懸霊わたひのウルクシアーノだっち！ウルって呼んでほしいっちい！」

ウルクシアーノことウルは、人間だったらふんぞりがえるように、ちよっただけ体を上に反らす。

懸霊は綿の恠妖あやしで、ふわふわ漂うだけなので人畜無害だ。

「ウルちゃんて言うの？よろしくね」

「他にもメンバーはいるんですがね、今は任務に出ているので戻ったら紹介しましょう。榊原さん、あとは私たちが」

「分かった。それでは真愛良くん、今日からここが君の職場だ。しっかりやりなさい」

「うん、ありがとう、総隊長！」

こうして真愛良は特殊課第三班に仲間入りすることになったのだ。

「ってわけで、まいらは警吏隊士になったの〜」

「十歳で警吏隊士かあ。確かに特殊課は十歳から入れるって聞いたけど、真愛良ちゃんがそうだったなんて驚いたよ」

「僕が十歳の頃なんて遊び呆けてたもんなあ。それにしても、僕が入る前っているんなヒトが三班にいたんだな。」

「えーと、ウルクシアーノさんだっけ？ 特殊課では見かけたことないから、そのヒトも退職したのかな？」

「真愛良ちゃん、ウルクシアーノさんって今は特殊課にいないよね？」

「総本部にはね。ウルちゃんは五年前に別の警吏庁に異動になったの。淑生ちゃんと入れ替わりにね」

「じゃあ淑生さんが入隊したのってその頃なんですか？」

「淑生さんは総隊長がいなくなったのでこっちの輪に加わっていた。毛布は巻きつけたままだけど。」

「そうねえ〜、あたしはただ、警吏隊っておもしろそうだな〜って思ったから入ったんだけどね、総隊長があヒトだっけって知ってたら入ったりしなかったわ」

「淑生さん、なんでそんなに総隊長苦手なんですか？」

「苦手なんじゃないわ。畏れてるの」

「畏れ…？」

「その割にはポンポンといろいろ言ってるような気が。神狐ってそんなに偉いのかな？」

「でも、同じ神族でも種族が違えば格の差はないに等しいんじゃないかな？ かつたっけ？」

「別に神狐を畏れてるわけじゃないわよ？ あのヒトの一族に対して畏れてるの。」

「あたしたち水宮の一族は、元々この国にいたわけじゃないわ。この国には昔から別の水神がいてね、その水神がこの国の守護神。あたしたちは別の国から移住してきた外津神とつかみなのよ」

な、なんだか意味深な話になってきたぞ？ たぶんこれって一般には知られてない話だよな？

それぞれの国や大陸には守護神が必ずいるんだけど、単なるおとぎ話としか思っていない人もたくさんいるんだよな。

僕だって昔は神様なんてあんまり信じてなかった。

毎年、藍泉の守護神である水神様や藍泉を建国した神様を祭る行事はあるんだけど、ただの宗教的行事としか思ってたし。

でも、淑生さんと会ってホントに神様はいるんだって分かったけどさ。

神様は実在するものだって子供でも知識にはあることだけど、それを世界中の人すべてが信じているわけでもない。

だって、神様はほとんど僕ら人間の前に姿を現さないから。

神話だって昔からちゃんと言い伝えられてきた“真実”と、誰かが作った“作り話”がある。神様しか知らない“事実”だってきつとあるだろうし。

淑生さんが今話してくれることは、その神様しか知らないことだろうな。藍泉神話だったらちゃんと全部覚えてるけど、これは知らないから。

「昔からいる水神様ってサヲギラ様ですよな？」

「そうよ、ちなみにあたしたち水宮はカガミの一族なの。で！問題はサヲギラじゃないのよ。サヲギラは同族だからいいんだけど、同じ守護神のオミリア様！あの方の一族なのよ、総隊長は！」

「えええつ！？オミリア様あ！？」

これには全員が驚いた。だって炎神オミリア様は、この藍泉を建国した神様なんだから！

さすがに天刻さんも知らなかったみたいで、天刻さんが目開けたの久し振りに見た。（そつちでも驚いたよ）

「もう何百年もこの国にいるけど、外津神ってことに変わりはないから、その国に元からいる神：国津神くにつかみに逆らうことなく敬意を示すのは当然なの。そうでなくても、あのヒトはあたしの何倍も生きて

るしね」

うーん、外津神とか国津神とか知らない単語出てきた……元からいる神様とか他の国から来た神様とか、そういう風に違うものだったんだ。神様の世界にもいろいろ決まりがあるんだなあ。

「まあ、あの人はそういうの気にしてないみたいだけど。こつちとしては気が気じゃないの！ 機嫌損ねでもしたら何されるかわからないもの」

とか言うわりには結構反論してるみたいだけど。そっかあ。淑生さんの総隊長への態度にはそういう意味があったのか。

うう、今度から総隊長にどう接すればいいんだろう。オミリア様に関係してるってことは、国王陛下よりも偉いわけだし。

ていうか、そんな偉いのになんかやってるんだろう？

「そういうことで、あたしの入隊エピソードは終わり。あと話してないのって、昂さんと春希とゆかりだけよね」

「オレも話すのか？」

【私はこれといって特別な理由ではないので…】

「この際だから話しちゃいなさいよ。昂さんの入隊エピソードはあたしも聞きたいし」

おまんじゅうをほおばってウインクする淑生さん。春希ちゃんは僕の半年後に入隊したんだっただよ。土師さんは…いつだろう？

土師さんはけだるそうにガシガシと頭を掻いて「仕方ないな」と話し出した。

「言っておくけどな、オレのもたいした理由じゃないぞ。十二年前“透化”を使って壁をすり抜けたところに総隊長がいて、特殊課に入らないかって誘われたんだよ。」

警吏隊なんて面倒だったから断ったんだけどな、そのあともしつこく近づいてきたから仕方なく入隊したってわけだ」

みんなの話を聞いてて思ったんだけど、なんだか総隊長っていつもタイミングよく現れるんだな…僕も総隊長にスカウトされたわけ

だし。

「な？ たいした理由じゃないだろ？」

「そうねえ、おもしろエピソードはなかったわね。春希はどうなの？」

【私も：真愛良さんと同じように、“声魅”の噂を聞いた総隊長さんがスカウトに来たんです。

私、この能力あまり好きじゃなかったんですけど、この能力が事件を解決するのに役立つならと思って、入隊を決意したんです】

天刻さんと同じ理由だ。やっぱり春希ちゃんも真面目だなー。ちゃんと考えて自分の道決めてるんだから。…それに比べて僕は…

「これで残るはゆかりんだけね！ さあ、ゆかりん！ 出番よ！」
淑生さんの声に、僕は我に返った。あんまりぼうつとしてたもんだから、みんなが訝しげに僕を見る。

「？ どうしたの？ ゆかりん」

「なんか元気ないみたい？」

「腹でも痛いのか？」

「ぼんやりするなんて海宝らしくないな」

【大丈夫ですか？ 海宝センパイ】

「長話になってしまいましたからねえ、疲れたのでは？」

みんなが心配してくれている。心配をかけたらだめだ。僕は笑顔で場を取り繕った。

「えっ？ あはは、大丈夫ですよ。入隊した理由でしたよね？ や

ー、僕はそれこそなんの理由もなしに入隊したんです。総隊長に言われるままに」

本当に、あの時は何も考えていなかった。疲れていて、自暴自棄になっていたから。

「僕が入隊したのは二年前ですけど、その頃の僕は志望大学に落ちて浪人生だったんです。

友達と遊ぶこともなく受験勉強の毎日だったのに不合格で…なんかどうでもよくなっちゃってたんですよね。

それで気分を紛らわせるために女の子に変装してバイトしてたんですけど…客として来た総隊長に一発でバレちゃって、才能を生かしてみないかってスカウトされたんですよ」

まさかバレるとは思っていなかったから驚いた。一発で見抜いたのは総隊長が初めてだったんだ。

「けど、特殊課って異能者や人外が入るところじゃないですか。僕は常人なのにいいんですかって聞いたら、総隊長は全然問題ないって…そう言われて、道を失いかけてた僕は後先考えずに入隊したんですよねー」

苦笑して肩をすくめてみせると、みんなは少し残念そうだった。

「なーんだ、そうだったの。特別な理由で入隊したわけじゃないのね」

「特殊課発足以来、初の常人だって言うから特別な意味があったのかと思つてたな」

「まいらはなんとなく気づいてたけど。あの総隊長のことだもん、特に深い意味はないんだろうなーって」

「あのオツサンのやることに意味があるんなら、俺ア初めから思つてなかったがな」

「まあ、榊原さんですからねえ」

なんとかごまかせたみたいだ。ほっとした僕は、春希ちゃんだけがまだ不安そうな顔で僕を見ていたことに気づいていなかった。

「なににせよ、これで全員話し終わったわね。さて、そろそろ仕事始めますか」

「そうだな。まずは部屋の片づけをしないと」

「かったりイゼ、このまんまでもよくねエ？」

「見つかったら怒られますよ。テイラーさんとか」

「鬼ババアはもうこの班のメンバーじゃねエんだからいいだろうが」「ほむらん、口より手を動かしたら？」

昔話が終わって、みんなはそれぞれのやることに戻っていく。だいぶ話しこんでたな。わっ、もう三時間近く経ってる！

みんなが部屋の片づけを始めたので、僕も手伝おうとした時だった。

「紫くん」

「へ？ ひわああつ、総隊長!？」

また出た!！ 神出鬼没のこのヒト! あ、どうしよう、神様だつて分かつちやったし今までどおりでいいのかなっ？

「少し頼みたいことがあるんだけどいいかな？ ああ、よかつたら春希くんも」

「頼みたいこと、ですか？」

「ちよつと資料の整理をね。今、手は空いてるのかな？」

「はい、大丈夫です」

「よかつた。柁周くーん、紫くんと春希くんを借りていくけれどいいかい？」

淑生さんがびくつとしてるのが見えた。今なら淑生さんの気持ちがよく解るよ。天刻さんが「いいですよー」と返す。

僕と春希ちゃんは総隊長に連れられて資料室へ向かった。

資料室は本部棟なので、特殊課棟をいったん出ないといけない。外に出ると、雪はいつのまにかやんでいた。

資料室に着くと、先客がいた。明るい短めの金髪、しゃがんでいても分かる大柄な体。

その人は僕たちが入ってきたことに気づくと、こちらを振り向いた。

「お？ 助っ人か？ 助かつたぜ〜！」

浅黒い肌で三十代半ばくらいの男性は豪快に笑う。笑うことで細められた瞳は赤。

本人の話では髪は昔から染めていて、瞳はカラーコンタクト。昔は紫だつたらしい。

「特殊課から借りてきたよ。紫くん、春希くん、彼と一緒にここの整理を頼むね」

「…えーと、全部…ですか？」

「そう。と言いたいところだけど、今日中には無理だろうから、こ
つちの棚からそつちの四番目の棚までで」

それでもかなりの量があるんですけど。うう、三人だけで終わる
のなあ。

まあ、これをやってる間は僕たちは呼ばれないだろうし……ガン
バ口。

「分かりました……」

「それでは、将之介くん。二人のこと頼んだよ」

「アイアイサー！」

ビシツと総隊長に敬礼する彼は坂月将之介さん。確か第一課の警
吏隊士で、三十四歳。

結婚もしてて、十歳になる息子さんが一人。特技は柔道で黒帯ら
しい。

っていうのは全部、坂月さんが自分で自慢げに話してた。

「んじゃ、えーと……あー、名前なんだっけか」

「海宝 紫です」

【金成屋春希です】

「そうそう、海宝と金成屋な！ はっは、悪いな、名前覚えんの苦
手だよ」

立ち上がった坂月さんは天刻さんや火群さんよりも背が高い。百
九十センチあるとかないとか言ってたなあ。

背は欲しいと思うけど、ここまではなくてもいいや。

「いえ、二、三回しか会ってませんし、覚えていなくても無理あり
ませんよ。さ、早く片づけましょう」

「おう、そうだな」

僕たち三人は資料の整理を始めた。これがなかなか骨が折れる。

一応、年別、月別、種類別に分けられてはいるんだけど、解決済み
の資料がまぎれてたり、間違ったところに入れられている場合があ
るんだよね。

解決済みのは処分しないとだし、元の場所を探してそこに入れた

り、分別されていない奴や最新の資料を分別したり。

「坂月さん、二〇一二年のがここにあるんですけどー」

「二〇一二年？ ちょっと待ってる。……あー、あったここだ。こつちくれ」

「はい」

資料を渡しに行くとき、坂月さんは五冊のファイルを広げていた。受け取った資料をそのうちの一冊に入れる。

渡すついでにちょっと訊いてみた。

「坂月さん、どうして今日は資料整理を？ それに、いつも一緒の真壁班長まかへはいないんですね」

「んー？ ちょうど手空いてたし、真壁先輩、今日は非番だから」

「そうなんですか」

「なあ、海宝。こつちよりあつちの手伝いしてやれよ」

「はい？」

「金成屋、筆談だろ？ 近くにいてやんないと情報伝達大変だろ。それに女の子だしな。」

オレが手貸してやってもいいけど、年が近いおまえの方がいいだろうし、慣れてる相手の方が金成屋もやりやすいだろ」

ファイルをしまいながら坂月さんがにかつと笑う。

坂月さんの言う通りかもしれない。春希ちゃんだと背が届かない資料もあるだろうし、筆談だから僕たちを呼ぶのも大変だよな。

「そうですね。気がつかなくてすみません」

「オレに謝ってもな。そりゃ金成屋本人に言えよ。女の子にや気利かせねえと、すーぐ機嫌損ねちまうぜ？ 好意を持ってんならなおさらな」

「へえ！？」

いきなり何を言い出すやらこの人は。新しいファイルを取り出してパラパラとめくりながら、坂月さんは笑いながら続ける。

「金成屋ってかわいいもんなあ。小動物系だし。職場恋愛は禁止されてないし」

「あああ、あのっ、坂月さん！？ ぼ、僕は別にそんな…」

「ん？ 何、好きじゃないのか？」

「え、いや、そりゃあかわいいなあ〜って思うことはよくあるし、ヒヨコみたいでいいよなあって…って何言わせるんですか！」

顔が熱い。きつと今、僕の顔は赤くなってる。資料整理に来てなんでこんな話に！？

「好きならチャンスがあったら迷わずぶつかってけよー。おまえ若いんだしさ。恋愛は男がリードしてやらんな。焦ってへマやらかすのはまずいけどよ、のんびりしてっつと横からっ攫われてくぜ」
「う……」

春希ちゃんのこととは…正直なところ、そういう対象として見たことがないこともない。

だって、ヒヨコみたいでかわいいなって思ってたのは事実だし。

でも、だからっつてどうこうなりたいわけじゃなくて、一緒に仕事できればそれでいいっつて言うか…

「おまえっつてさー、なんとなくオレの親友に似てんだよな。恋愛に奥手でスローペースだよ。ま、そいつは運よく相手をおっ攫われずにゴールインできたけどな」

ゴ、ゴールインっつて、それはおめでとうございます！ けど僕はそこまで考えてないっつて言うか、いやもうほんと一緒にいらればいいわけっつてっ。

「オレも嫁さんは一筋縄じゃ手に入られないような相手だよ、結婚するまでは苦労したぜ」

「な、何か深い事情でも？」

「オレの嫁さん、人外でなー。人魚なんだよ実は」

「に、人魚！？」

素っ頓狂な声を上げる僕。すると坂月さんはへらっつと笑って、持っていたファイルをぎゅっつと抱きしめた。

「いやー、それがもうメツチャかわいくてさあ。あ、もちろん息子もかわいいけどな。嫁さん似てよ、ちっさくてやんちゃでもうった

まんねえ！ あ、写真見るか？ 見てくれよこの愛らしさを！」

坂月さんはファイルをぱいっと捨てて、制服のポケットからヴァモバを出す。

待ち受け画像にしているらしく、ヴァモバを見せびらかした。

正直困るんですけど。ていうか見るなんて一言も言っていないんですけど。

写真見せていろいろ語り出しちゃってるし。このままじゃ資料整理が終わらないよっ。

「坂月さんっ、恋愛感情云々は置いといて、春希ちゃんを手伝った方がいっていう意見には一理あると思いますのでっ、僕は春希ちゃんのところ行きますっ！」

敬礼。回れ右。僕は百メートル走のスタートダッシュよろしく駆け出した。

坂月さんって親バカなんだなあ。でも、奥さんが人外だったなんて驚いたよ。

そりゃあ人間社会に溶け込んでる人外もいるし、それで好きになる人間もいるだろうけどね。

あ、そう言えば火群さんも、天狗族の滋生しきょうさんが好きだったんだっけ。

僕の周りには人外を好きになった人っていないなかったから、人外に對してそういう気持ちになるのってよく分からないけど…誰かを好きになるのに、相手が人間だとか人外だとかは関係ないんだな。

そんなことを考えていたら、ちょうど春希ちゃんが棚の向こうから顔を出した。

途端に坂月さんの言葉を思い出して、僕は思わず赤面してしまっ

た。
「わわっ、春希ちゃん！」

春希ちゃんは僕に驚いて、一歩後ずさりする。なんだかまともに春希ちゃんの顔が見れない。坂月さんがあんなこと言うから、意識しちゃってるよ僕！

「あ、あのさ、こつち春希ちゃん一人だと大変だろうから手伝おうかなって」

春希ちゃんは目をしばたたかせてから、スケッチブックに【ありがとうございます】と書いて微笑んだ。

その笑顔にちよつとどきつとする。うう、完全に意識しちゃってます僕。

僕たちって周りには坂月さんが言ったように見えてるのかな？

それとも坂月さんにだけそう映ったとか？ あああ、そうでありますようにっ。

僕たちは棚の上と下を手分けして整理することにした。資料整理を始めてからだいぶ経つけど、今何時だろう？ と思いつながらファイルをめくっていると、ある事件の資料のページで手が止まった。

“？^{コウガ}牙”

僕の目はその単語に釘付けになる。？牙は何十年前から、この大陸で無差別殺人を繰り返している犯罪組織。

組織の正確な人数も目的も何も分かっていない。分かっているのは、首領が紅い髪の男だということ。

奴らは十数年に何度か事件を起こして、すぐに姿を消す。組織の人間はいまだ一人も捕まっていない。

奴らの犯行は一目で分かる。奴らの犯行現場には必ず“印”が残されるからだ。

黒い三日月を横にして、黒い雷マークが貫いている凶形。それが？牙の“印”。

『 』 と思っているかい？』

耳の奥に聞こえる声と、脳裏に浮かんだ光景。僕はさっき、一つだけ嘘をついた。警吏隊に入隊した理由。

今から三年前。僕は、高校三年生。優しい両親とかわいい妹。それが僕の家族構成 だった。

志望大学合格に向けて必死に勉強の毎日。ある日、妹がうれしそうに顔を報告してきた。

「おにーいちゃん。勉強はかどってる〜?」

「朱莉^{あかり}: ノックしてっつていつも言ってるでしょ」

ため息交じりに振り返ると、妹の朱莉がにこにこ笑って部屋に入ってきた。朱莉は僕の四つ下の妹で十四歳。甘えん坊で、ちよつとイタズラ好きな子だ。

「もう〜、何今さら気にしてるの? それよりさ、聞いてよお兄ちゃん! あたしね、彼氏できたんだあ〜」

「彼氏い!?!」

僕は思わず身を乗り出した。そのせいで椅子が体重を支えきれず、前に転倒した。

「いったあ!」

「お兄ちゃん、大丈夫!?!」

「僕のことよりっ、彼氏つて!?! いつ!? それっ、父さんと母さんには!?!」

朱莉の両肩をつかんで問い詰める。うろたえている僕に、朱莉は困ったように笑った。

「言ってないよ〜。おととい告白されてー、今度お兄ちゃんに紹介するからね」

「彼氏だなんて朱莉には早すぎるよ! まだ中学生でしょ!」

「お兄ちゃんてば古臭い〜。今どき、中学生でカレカノなんて普通だよ」

「そ、そうなの? いやそうじゃなくて! 紹介だなんて緊張するよ! といつか僕に最初でいいの?」

不安げに問いかけると、朱莉は少しはにかんで頷いた。

「うん。彼氏ができたら、一番最初にお兄ちゃんに紹介するっつて決めてたの。お兄ちゃんが大好きだから、一番最初に認めてもらいたいんだ」

その笑顔がとてもうれしそうだったから、僕もつられて笑った。

でも、彼氏ってどんな子だろう？ 同級生かな、先輩とか？ 兄らしくしつかりした態度じゃないとだよな！

「ねえ、朱莉？ その彼氏ってどんな子？」

「うーん、お兄ちゃんと同じくらい優しくてー、でも顔はお兄ちゃんよりかっこいいかな」

「あつそ」

「うそうそ、拗ねないでよ。お兄ちゃんと同じくらいかっこいいよ！」

そんな風に幸せそうに笑っていた。けれど、朱莉の笑顔はその日で消えてしまったんだ。

午後から朱莉は友達と映画を見に行くと言って出掛けた。夜になっても、朱莉が帰ってこなくて、心配になった両親は警吏隊に捜索願を出した。

朱莉は帰りが遅くなる時は必ず連絡してきた。なのに、八時を過ぎてても連絡はなくて、朱莉の友達に連絡したらもう帰ってるはずだつて言われた。

僕は不安で心配でたまらなかった。じっとしていられなくて、僕は交番に駆け込んだ。

「あの、すみません。捜索願を出した海宝なんですけど…」

「ああ、お兄さんかな？ 現在捜索中だけど、残念ながら妹さんはまだ見つかっていないんだ」

「そう、ですか…」

肩を落としてうなだれた時だった。僕のヴァモバが着信音を奏でる。

「はい、もしもし。あ、母さん？ ……え？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。それでも僕はなんとかヴァモバを切った。

「…すみません、妹が、見つかったらしいので行きます…」

「え？ こっちにはまだ報告ないけど…あつ、君！？」

警吏隊士の言葉を聞かずに、僕は交番を飛び出していた。

《…紫…朱莉が、見つかったわ。早く…早く来て》
そう言う母さんの声は震えていた。涙声だった。嫌な予感が突き抜ける。

僕はエアバイクで夜の道を疾走した。そして、その現場に辿り着いたんだ。

港の防波堤近く。そこに慌ただしく動く警吏隊と両親がいて、泣き崩れている母さんを父さんが慰めていた。

僕の姿に気づいた父さんが振り向く。父さんも泣いていた。

「紫……」

「父さん、朱莉は？　なんでこんなに、たくさん警吏隊士が…それに」

何？　この臭い。何かが焼け焦げたような異臭。

鼻と口元を押さえて父さんに近寄ると、父さんは無言で道の先を指差した。

そつちを見た僕は、目を見開いた。そこには、黒焦げになった人間の体の一部が点々と転がっていたから。

手や足らしきものがパトカーの明かりに照らされている。

「…あれ…腕…？　うそ…まさか…」

体が震える。異臭が鼻につき、吐き気が込み上げた。

口を押さえて顔を逸らした時、視界にある物が飛び込んできた。

なぜかそれだけは黒焦げではなくて、ありのままをさらしている。

それを見た瞬間、吐き気は引っ込んで、代わりに絶望が押し寄せた。

それは、血まみれの朱莉の首。

「わあああああああっ！！」

極限まで見開かれた目。死の瞬間、悲鳴を上げたんだろう、開かれた口からは血の筋が流れていて。

バラバラになった体。他の体は黒焦げで、朱莉のものかも判らないくらいなのに、どうして顔は、首はそのままなんだ。

首も黒焦げだったなら、このバラバラの黒焦げ死体が朱莉じゃない

いと思えたのに。

「朱莉…朱莉っ！？　なんで！？　なんで朱莉が…こんなことに…！！」

現場に漂う異臭は人間の焼けた臭い。朱莉が、焼けた臭い。

「誰が…誰がこんなひどいことお…っ！」

涙で視界がぼやける。そこに警吏隊士の声が滑り込んだ。

「班長、これを」

部下が紙に描かれたマークを見せる。上司が忌々しげに眉をひそめた。

「ん？　これは…また？牙か」

？牙。聞いたことがあった。何十年も前から捕まっていない犯罪組織。朱莉をこんな姿にしたのは、？牙。

初めて彼氏ができてうれしそうに笑っていた朱莉。あの子はまだ十四歳だったのに。

どうして、こんな無残な最期を迎えないといけなかったのか。

事件のシヨックで、僕は受験に失敗した。その後はみんなに話した通り。女装してバイトして、総隊長に出会った。

「君、男だよ。海宝　紫くん？」

店長には女と偽っていたから、僕はすぐに総隊長を店の外に連れ出した。そこで僕は総隊長に言われたんだ。

「どうして分かったんですか？　僕が男だって」

声も体格も仕草も女になりきってたのに。顔を合わせずに言った僕に、総隊長は飄々と笑う。

「匂いかな。私は鼻が利くんでね」

「はあ」

「君は海宝朱莉さんの兄だよ？　？牙事件の被害者の…！！」

表情がこわばる。総隊長は本心を悟らせない笑顔で告げた。

「ねえ、紫くん。仇を討ちたいと思っているかい？」

その瞬間、弾けた。僕の中で、朱莉がいなくなっただあの日からわ

だかまっていたものが、弾けた。
ゆつくりと総隊長の顔を見る。

「…いい眼をしているね」

復讐者の眼だ。総隊長が囁く。そして僕は、警吏隊に入ったんだ。
？牙の情報を手に入れるために。

ばしんっ、と僕は思い切りファイルを閉じた。その音に驚いた春
希ちゃんがびくっつと顔を上げる。

「あ、ごめんごめん。ちょっと勢いつけすぎちゃった」

下の棚を整理していた春希ちゃんは立ち上がって、スケッチブッ
クを見せた。

【海宝センパイ、なんだか少しいつもと様子が違います】

「え……」

【さっきも、入隊した理由を話した時、なんだか遠い目をしていま
した】

僕はドキリとする。気づかれていたなんて。僕は一度視線を逸ら
したけど、春希ちゃんに見つめられると洗いざらい話してしまいそ
うになる。

きつと春希ちゃんが、朱莉と年が近いからだろうな。朱莉が生き
ていたら、十七歳になっていたはずだから。

でもダメだ。彼女を巻き込んだんじゃいけない。思い直して、僕は春
希ちゃんと目を合わせる。

「ごめんね、心配かけて。でも大丈夫だから。少し、つらいことを
思い出したただだよ」

僕は無意識に春希ちゃんの頭を撫でていた。春希ちゃんが赤面し
て、僕は自分の行動に気づいた。

「わっ、ご、ごめん！ 何やってんだろ、僕！」

朱莉のことを思い出したせいで、朱莉と春希ちゃんを重ねちゃっ
たみたい。

「うわー、本気で恥ずかしい。しかもそれを坂月さんに見られた。」

「お二人さん。いい雰囲気のところ悪いんですがね」

「わー！ 坂月さんっっ」

「そろそろ昼だから食堂行こうぜ。奢ってやつからよ」

「い、いいんですか？ ありがとうございます」

二人して顔が赤い。僕たちは坂月さんと食堂に向かった。坂月さんはずつとにやにやしてて、居心地が悪かった。

紫たちが資料室を出た後、陽向は音もなく現れ、紫が見ていたファイルを見る。

「紫くんはまだちゃんと覚えているみたいだね。ここに来た目的を」
「そうでなければおもしろくない。陽向はくすりと笑って、その場から掻き消える。」

消えた陽向は総帥室前の廊下に現れ、チャイムを鳴らした。

「総帥、入りますよ」

自動ドアのボタンを押して中に入る。総帥室への入室は、総隊長である陽向にのみ許されている。

他の隊士は総帥と陽向の許可が下りない限り入ることは許されない。
い。

中に入ると、いくつかの観葉植物が部屋の隅にあり、壁には歴代の総帥の写真が飾られている。

正面は白いカーテンで部屋が区切られ、そのカーテンの向こう側に警吏庁総帥がいる。ハズ。

「円藤くん、いるかい？」

声をかけると、カーテンにぼんやりと人影が映った。

「いるよ。どうしたんだ？ 陽向」

機械越しでない生の声。少し低めの男性ボイス。陽向はにっこり笑って、いつの間持っていたランチボックスをひよいと上げる。

「もうすぐお昼だからね、誘いに来たんだよ」

この部屋には総帥と陽向しかいないので、敬語抜きだ。返ってきたのは少し高めの女性ボイス。

「もうそんな時間？　時間が経つのは早いな」

「そう思うほど何かに夢中になっていたのかな？」

陽向が問うと、男性ボイスと女性ボイスが交互に返ってくる。

「うん、なかなかこのゲームは面白い」

「結構難しいんだよ」

「陽向もやってみるかい？」

「私よりはうまいんじゃないかな」

微笑笑して、陽向はカーテンに近づく。まったく、職務中にゲームとは。けれど、総帥というのは存外暇な時間が多いのだ。

「この間の奴は円藤くんに負けたなあ」

「あれは私の得意分野だからね」

「今日のお弁当のおかずは何？」

「さて、なんだろうね。円藤くんはまたコンビニ弁当かい？」

「またとは失礼な。昨日はちゃんと手作りだったよ」

「今日は朝寒かったからコンビニで買って来たけれど」

総帥のため息混じりの言葉に、陽向は窓の外に目をやった。また雪が降り始め、粉雪が飛んでいる。

「でも、もう少しで三月も終わりだね。四月になって、春が来たら忙しくなるよ。いろいろとね」

どこか意味ありげな物言いだ。総帥は陽向の横顔を見つめる。

「それは神狐の予言？」

静かな問いかけに、陽向は「いいや」と小さく首を横に振った。総帥に顔を戻し、目を細めて微笑する。

「預言だよ」

藍泉歴二〇三四年。春の訪れとともに新たな物語が始まる。

食堂で坂月さんに昼食を奢ってもらった後、残りの資料整理を終

わらせた。

再び降り始めた雪は夜まで降り続いて、少しだけ積もった。自宅の窓からははらと舞う雪を見ながら、僕はちびちびとココアを飲んでいた。

冬は嫌いじゃないけど、こつ急に冷えると困るんだよね。

春が待ち遠しいよ。暦上じゃもう春なんだけど、本格的な春は四月を過ぎてから。

風が強まり、雪の混じった風が窓を叩いた。早く暖かくならないかな。

僕はココアの最後の一口を飲んでから、カーテンを閉めた。

陸（後書き）

追伸列記簿

いきなりですが、最終回です。

どうもこんにちは、甲斐日向です。前回何も言いませんでしたが、今回で特ゆかは終了〜！ です！

いや、中途半端感たつぷりですが、元々入隊エピソードをつらつらと綴るだけの続編だったので、エピソード書き終わり次第終了なのは初めから決めてたことなので。

と言っても前回まで一人ひとりだったのに、今回は残りの五人全員一気にエピソード公開（？）で、そのせいで余計に中途半端感増し。

でも、ほんとに天刻さんとほむらん以外はこれと言ったエピソードないですよ。ゆかりんはかなり重いエピソードでしたが。

この話はエデンシリーズの第二部なので、前々作のマジラビと、特ゆかと同時進行のササラの間を繋ぐ物語です。

なので、この話はササラへの伏線がたくさん張られています。

あと、マジラビともリンクしているので、マジラビのとあるキャラが登場していますね。

これで特ゆかの世界は終わりですが、物語はササラへと続いています。

それでは、最後までのお付き合いありがとうございました。他作品でもお会いできることを祈りつつ、終幕。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7084h/>

特殊警吏隊士 海宝紫

2011年3月21日16時27分発行